源氏物語評釈

紅葉賀

+

旧注」巻の名は詞をもて号す。但、此巻に紅葉賀とつづきたる詞は見え 「明注」巻の名は詞をもて号す。但、此巻に紅葉賀とつづきたる詞は見え 「田注」巻の名目を例とせるにや。 「田注」巻の名は詞をもて号す。但、此巻に紅葉の質とつづきたる詞は見え 「田注」巻の名は詞をもて号す。但、此巻に紅葉の質とつづきたる詞は見え

上天皇五八之御齢,也、これ始なり。
上天皇五八之御齢,也、これ始なり。
でれはじめ也。太上天皇の御賀は、淳和天皇天長二年十一月、奉上賀,太四十二、賀は、仁明天皇嘉祥二年三月、興福寺大法師等奉上賀,天皇満,四十二、紀賀とは、其年の満たるを賀して、行末の宝算を祈る心也。天皇の御

り。されどすべらぎの御賀の事は、此抄のごとくのみ見ゆ。藻に年賀の詩あり。然れば皇朝にて年賀するも、いと古き世より侍りけ��賀は、四十より始めて末々十とせに満るごとに賀ふ例也云々。懐風

| | 国際氏君十八の十月より十九の秋まで也。或人間、若紫も末摘花も此| | 国際氏君十八の十月より十九の秋まで也。或人間、若紫も末摘花も此|
| 国際氏君十八の十月より十九の秋まで也。或人間、若紫も末摘花も此|

棚巻名の事、諸抄のごとし。十月の十日あまり、紅葉の蔭にて御賀の郷巻名の事、諸抄のごとし。十月の十日あまり、紅葉の蔭にてしられましたの事、諸抄のごとし。十月の十日あまり、紅葉の蔭にて御賀の

侍の御いどみの事をいへるなどは、例の正副の脈を貫したる也。又弘徽 給ふよしをあらはし、其御物思ひのすゑ、竟には尼となり給はん伏案を まじへてかたるを主と立られたり。さるは、此巻にてかの物のまぎれの照応の法といふべし。さて此巻は、藤壺の御事と紫上の事とをたがひに 法なることはいふもさらにて、かつは彼巻々と相照して年月のほどをも 帝の御寵愛大かたならず、藤壺を中宮に立給ひて、帝は御位をおりゐさ すすめゆき、源氏君はこの物遠くつれなき御なぐさめにとて、紫上に思 逢給はんことを深くつつみなげき給ひて、 若宮生れ給ひ、其事によりて藤壺は世の中をはばかり給ひて、源氏君に さて行幸の事をかの巻々にあらはし置れたるは、例の事をにはかにせぬ て説出たる也。はといひなりといへる辞の勢ひに心を付て味はふべし。 られたるは、若紫巻・末摘花巻にすでに其伏案をあらはし置たるをうけ **郵**此巻の発端に、「朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり」と書出 たり。其中に、舞楽の所に源氏君のかたてに頭中将を相そへ、末に源内 つひには栄をきはめ給はんの伏案を、遠く思ひ構へられたるものと見え りて、源氏君須磨へさすらへ給ひ、さて後に冷泉院がたの御世となりて、 せ給はん御下心の出来たる事をいへるは、一たび朱雀院がたの御世とな しをやうやうにかたりもてゆくなり。さて又若宮のうまれ給ふにつけて、 ひうつり給ふさまをあらはして、藤のゆかりの紫にうつりかはるべきよ しるべく、彼と此と事を分ちたる結構をも示すべきためにて、いみじき やうやう御物遠くなりまさり

て終られたるにて、いひしらずあぢはひあり。 て終られたるにて、いひしらずあぢはひあり。 で終られたるにて、いひしらずあぢはひあり。 こさて巻末に藤壺の立后の御事、若宮と源氏君と似給へる事をいひて とぢめられたるは、此巻の本の意をうしなはず、且末の巻々の端を起し とがあられたるにて、いひしらずあぢはひあり。

給へるさまをあらはして葵巻の結構とせられたるもめでたし。 ど、つゆ紛れずしてめでたく、紫上に琴教へ給ふ所、やうやうおよずけ をほころばしきて、さる故をことわり説れたるなど、例のよろし。 ふたたび犬君といふ女童が麁忽を引出られたる照対も、いと委しと言べ おぼしよらで」といへる心ききたる書ざま也。紫上のひいな遊の所に、 る、猶いとめでたし。三条の宮にて兵部卿親王に対面し給へるくだりも、 又この御舞楽の事につきて、帝の御心、藤壺の御心、源氏君の御心など は、紅葉のよせなるべし。かかる事にも其縁を思はれたる、いといみじ。 御賀によせあればなるべく、 の生れ給へるにつけても、帝・藤壺・源氏君の御心を書分られたる所な かたみに女にて見奉らまほしといへる、いとをかしく、「むこになどは にてめづらしけもなき物から、つゆのみだれなくてきはやかにわかれた かたがたに書分られたるに、げにさもあるべく聞ゆるなどは、れいの事 ○舞楽の段に青海波をとり出たるは、かの「桂殿迎」初歳。云々」の詠の語。 いとめでたし。紫上を源氏君むかへとり給ふとはみこはまだ知給はずて、 し。大殿の事は葵巻の伏線ながら、やうやう御中のむつましからぬさま 承香殿ばらの四の御子の秋風楽まひ給へる

> 将の屛風をたたみよせてさわがす事をいひさして、内侍のさきざき有し 事より思ふ心を委しくいひ、次に源氏君のおもほす心の中を説ことわら の正副の脈を失はずして全く瑕なき玉となれり。 のいどみ給ふゆゑよしをことわりて止められたるなど、さきの巻々より づさずしてつらねられたるなど、さばかりの事ならねど本上のかどかど きて見つけたる余波をいたくひびかしたる照対の法なり。其中に、頭中 頭中将を引もてきていたく挑ませたるは、末摘花巻に、常陸宮にしたひ 筆つき、潜める龍の、雲をおこして、見るがうちに大空にのほるここちす。 たりし扇のいろめかしき絵やうより出し来て、 しさ溢れて聞えたり。かくて源氏君の御いきほひのいみしきに、頭中将 れば、といふ歌まて六首の贈答、例のよどみなく珍らしきに縁の詞をは つとめて直衣の袖と帯とを取かへし給ひて、、君にかく引取れぬる帯な と帯とを引しろひて、つつむめる名やもり出ん云々、とよまれたるより、 れたるなど、かく烈しくせはしき中に聊も情景を失はず、さて次に直衣 の詞によりてよまれたるなど、つゆのよどみなくして忽に転り忽に変る 人しもあらじ、といふ歌、又《人妻はあなわづらはし、といふ歌を東屋 て」といひ、、おしひらいてきませと打そへたり、といひて、、立ぬるる 又内侍が、瓜作になりやしなまし、とうたひたる所に、「君東屋をうたひ に、、思ひながらぞや、 いふ歌、又、駒なつくめる森の木がくれ、といふ歌などよまれたる其次 ○源内侍の一段、老女の色めきたるさまをいとよく写しかかれたり。 **~もりこそ夏の、とあざれたる後に、**´手馴の駒にかり飼ん、と とあるより長柄の橋柱にいひうつされたるなど、 、もりの下草おいぬれば、 こころをつくへし。

兀

朱雀院の行幸

天皇の他へ出ますを行幸といふ。字義、余釈にいへり。さてこれは、 りてとり出たる也。心をつくべし。 |箋||三条朱雀に四町に作られたり。是後院なり。天子脱屣の後の御在所也。 是若紫・末摘花の巻々にいささかづつにほはせたる脈を、 朱雀院におはします先帝の御賀し給はん為に、彼院へ出ます事 ここに至

よのつねならず云々

き度の事、 岷一今度の御賀、 別して引きつくろはるる故に、尋常ならず面白かるべ

御かたがた物見給はぬことを

上も藤つぼの見給はざらんを |細||禁中の外なれば、后・女御などの御見物かなはざる也

試楽を御前にて 取わきたる御寵愛のほどをあらはしたる脈也

しがくは内裏にてせさせ給ひて、 |花||御賀には試楽・調楽などいひて、 藤壺女御に見せ奉らせ給ふなり。 舞楽のこころみどもあり。 此時の

給ひける。

かたてには、

人にはことな

れば、

試楽を御前にてせさせ給ふ。*> ガケー ンマへ

源氏の中将は、

源氏の中将大殿の頭中将

玉補かく改めてかけるは、おほやけの人々より称する意なり

時、依力動改造 青色袍、 」。※「此曲」の右の「バンシキ」は誤刻の消し忘れか。 依、勅改、盤涉調。 但、 蒲萄染下襲面大海浦、 此曲承和御時、 詠小野篁朝臣作云々 大海浦半臂。舞手向二一方二、摸二寄波引波 大納言良峯安世朝臣、 舞装束、 奉;勅命|作;此舞 表榜文小葵、

るべし **|花||青海波は盤渉調唐楽也。「から人の袖ふる」とよみ給へるに相違なか** ※「から人の」の歌は七ページに出る。

に、

おなじまひのあしぶみおももち、

「かたて」 は、 片相手といふほどの義なり

花のかたはらのみやま木

る語のいきほひにてもしるべし云々。 |玉||目もうつらぬよし也。人にはことなるを「たちならびては」 といへ

|花||うつぼの第九云、「花のかたはらの常盤木のやうに見え給ふ云々」。 源氏君を花にたとへたるはいふもさらなり。 たることのたとへなり。 「み山木」は、 けおされ

朱雀院の行幸は、 神無月の十日あまりなり。 *のつねならず、 おも

しろかるべきたびの事なりければ、 御かたがた物見給はぬことを、

くちをしがり給ふ。 うへも藤壺の見給はざらんを、 ラソクニ あかずおぼさる

大殿の頭中将、 かたちよう。 将 ^第 青海波をぞまひ

るを、 _ガ 源 △源ニ こ立が、たちならびては、 花のかたはらのみ山木なり。 いりがたの日

かげさやかにさしたるに、 がくのこゑまさり、 * 物のおもしろきほど え***

どし給へるは、これやほとけの御かれうびんがのこゑならんと聞ゆ。

△マダ

よに見えぬさまなり。

おもしろくあはれなるに、 みかどなみだをのごひ給ふ。 上達部みこ

におもはくあるさまをするをいふ。 「あしぶみ」は足の拍子、「おももち」は顔つきといふ意にて、 かけしき例のうちあひたり。「同じ舞」とは、俗にいはゆる相舞の意也。 舞のふり

たちも、

みななき給ひぬ。

えいはてて、 章

袖うちなほし給へるに、

_待ま

えいなどし給へるは

桐楼媚。早年 剪、花梅樹下 蝶鸞画梁辺。

ちとりたるがくのにぎははしきに、

かほの色あひまさりて、

つ*ねよ

少し穏ならず。さて右の詩を字音のままに詠めて吟ずるを、えいとはい歌この末句なほ誤字あるべきかと新釈にもいはれたり。いかさまにも へるなり。和名抄にも青海波の下に「有ム詠」と見えたり。

ほとけの御かれうびんがの声

の鳥にもまさりたりといへり。是を仏の説法の声にたとふる也。 「かれうびんが」とは、鳥の名也。かひこの中よりなく声のいづれ

だならずおぼして、

神など空にめでつべきかたちかな。

うたてゆゆ

とのたまふを、

わかき女房などは、

心うしとみみとどめけり。

そのかると見え給ふ。

東宮の女御、

かくめでたきにつけても、

た

みかどなみだをのごひ給ふ 「御」の字は「声」の上にある意也。

|岷||桐壺帝をはじめて、 親王・大臣以下皆感涙をもよほす也

えいはてて袖打なほし給へるに |岷|| 詠のあひだは音楽の声をやむる也。 作法あり。 されば詠はてて楽を

を「待とりたる」といふ也云々。

藤つぼは、

おふけなき心なからましかば、

ましてめでたく見えまし、

つねよりもひかると ● 「袖打なほし」は、既に詠はてて舞んとして袖をなほし給ふさまなり。

|拾|| ひかる源氏といふゆゑに「常よりも」といへり。

神など空にめでつべき

うの事をもて書る也 こそなく侍りしか。万の人しほたれぬは侍らざりき。御かたちのひかるやうにうつくしくわたらせ給ひしかば、[河]大鏡云、「いみじく侍りしことは、やがて同君延喜の大井の行幸に、富小路の御息所の御腹の親王唯明の、七歳 七歳にて舞まはせ給へりしばかり 山神のめててとり奉りき」。かや の事

はにかやうの事を思ひて物せられたるにはあるべし。 「空にめでつべき」とは、空より見て愛つべきといふ意なるべし

うたてゆゆしと しくあぶないなどとそねまし

への給

₩ 弘徽殿のかくの給ふを若き女房など聞て笑止がる也

おふけなき心なからましかば

|岷|源の藤つぼを心かけ給ふ事なくば、 いよいよめでたく見えんとの藤壺の心也。

六

宮はやがて御とのる也けり

ふかく にて」といひてなほ御寵の深きをあらはされたる筆つき、例のめでたし。 さまをにほはせ、さて舞の評よりしてつひに藤壺に「見せ奉らんの御心 ■藤つぼ直に御とのるに参り給へることをいひて寵の甚しきをあらは 其ついでに源氏君の御評を引いでて藤壺の心のおににくるしみ給ふ 心あるさま思ふべし

あいなう御いらへ聞えにくくて

|細||藤つぼの御心のおににいらへにくくし給ふ也|

釈 くべつにといふ意也。此一句いとよく情景をつくされたり 「あいなう」の解、 訳注のごとし。「ことに侍りつ」とは、 他に異に

いへのこはことなる

君達なり云々」 ゃ んことなき家のこども云々」。 良家子也。若紫巻云、「十 マ」。栄花物語第七東三条院御賀「舞人家の子・月に朱雀院の行幸あるべしとて、舞人など・ 舞人など、 0

|細| 堂上の人をいふ。至徳記云、良家とは摂家以下 上臈家也。

秋良家の君達は格別にて、 地下とは品格ことなり、 との意也

まひの師の男ども

湖是は伶人の舞人の事也

心みの日かくつくしぬれば ₩「ここしう」は児々繁の意也。ここしうなまめいたるすぢ オボコメキテう Ó しく愛ら しき意也

|岷||試楽の日かやうにあまり出来たれば、 賀の日や結句 ふできならん、

見せ奉らんの心にて

一様ではいますがある。 と也。御寵のかぎりなき

もなきみだりごこちなれど、

さながら舞たり、

と也。

藤壺の見給ふと思ふにつけては、

いかに御覧じけん云々

即昨日の舞をいかに御覧じつらん、

もの思ふに云々

ろしめしきやいなや、と也。こたびは見せ奉らんの御料なれば、強て袖をめぐらせし也。さる意をし |新||君こふと物をのみ思へば立まふべき心ちなどはもとより う侍らぬを、

> とおぼすに、 夢のここちなんし給ひける。 藤yボ ス グニ 直 宿 宮はやがて御とのゐなり

け ý_° けふのしがくは、 青海波にことみなつきぬ。 いかがみ給ひつ

る、 と聞え給へば、 **すニトナウムサト** あいなう御いらへ聞えにくくて、 ^x糠藁 、ことに侍りつ、

とばかり聞え給ふ。 カタアヒテ ワロクハ かたてもけしうはあらずこそ見えつれ。 ^{葡萄} まひの

さまてつかひなん、 家のこはことなる。 この世に名をえたるまひの

師のをのこどもは、 **けにいとかしこけれど、** オホボコニ 艶 麗

すぢをえなん見せぬ。 心みの日かくつくしつれば、 Fræプロン ないがけや

さうざうしく、と思へど、 、見せ奉らんの心にて、 ショクせさせつる、

など聞え給ふ©つとめて中将の君、 いかに御覧じけん。よにしらぬ**ペララ

みだり心ちながらこそ |舞侍リツレ

那ここより歌へかかる意也。 しを地より評じたる也。 さて次の詞どもは、 御返りのあり し事の

物思ふにたちまふべくもあらぬ身のそで打ふり

し心しりきや。

あ

めもあやなりし云々

舞をたぐひなく面白く思ひ給ひし故にてぞ、 ||細||平生は玉さかの御返事もなかり じに、 て、と草子地にことわる也。けふ御返りのあるは、昨日 日の

から人の云々

細|青海波は唐楽也。もろこしの事ははるかなる事なれば知がたし、 昨

挙て弁ふるがごとし は思ひ侍り、とふくめたるにや。猶よく考ふべし。諸抄の説は、余釈にれに面白く見き、といひて、下には、立につけ居るにつけていとほしとめたるにもあらんか。下句は、さはいへど立つ居つする舞のさまはあは 慕のことを、それはあはずして遠きことなれば今はさはあらねど、と含 て歌の意は、から人の袖ふる古事の心は、遠きさかひの事なれば知るべ波は左の唐楽也といふばかりの事を、かくはいふまじきことわり也。さ 下の文に、 てあり ●此歌の上句、詳ならず。案ふに、「袖ふる事」とあるに古事といふこ 日の源の舞給ふさま、たぐひなくあばれに忘れがたかりしよし也。 きにあらねど、 ぼしやれる、 とをいひかけたるにや。そは此楽の起りの古事など、そのかみは伝はり しなるべし。事といふ字に心を付て思ふべし。さる故なくては、 かうやうのかたさへたとたとしからず、人のみかどまでお 御きさき詞の、 といひて、源の歌に、袖打ふりし心しりきや」とある恋 かねてもと」とあること聞えがたし。 青海

おほかたには

|玉||密通のかたにてあはれと見しにはあらず、ただ公界にてあはれとは 侍りし、と也。「には」のはもじにも其意あり。

きことばの、

^{予ねても、}

アシラルル」とほほゑまれて、

ひきひろ

△シカシ

大かたにはあはれと見き、といふ意を歌にいひそへたる也

かうやうのかたさへたどたどしからず云々

小上にいへるごとく、 き御后がねの御詞ぞ、 いかがあらん。 この青海波の曲の起源の古事をさへしろしめして、 女宮なりともその世にさばかりの事しり給はんは、何のめづらしき事かまうって、「京」とその才学をほめ給ふなるべし。花鳥・細流などに、左右の楽のわけめを知て、左は唐楽也と分別とその才学をほめ給ふなるべし。花鳥・細流などに、左どたどしからず、他朝までおぼしやれるは、 左は唐楽也と分別し給ふ事のやうに説給 まことに人の君とある

持経のやうに

へるは、

財持経は手を放たず尊び信じてよむ物なれば、 源氏君の此御文を大切にし給ふさまをたとへていへるなり。 旧注説つくされず

き。 方 不 来 内 ナ ラ ズ ひしのばれずやありけ なかしこ、 おほかたには、 とある、 御返り、 とあるを、 人のみかどまでおぼしやれる、 めもあやなりし御さまかたちに、 かぎりなうめづら ぢ経のやうに、 ** かうやうの 御[◆] きさ 見給

七

行幸には云々

|岷|是より行幸の当日の儀也。

₩ 花鳥・箋などに、これを行幸の前日と見られたるは、 わろし。

れいのがくの船ども

釈音楽する人々、 「例の」とはいへり。 御庭の池に船を浮べて漕めぐりつつ奏する事也。 故

もろこしこまとつくしたる

くさおほかり |河| 唐左高麗右。唐土・高麗の楽をつくさるるなり

巡ぐりて、

唐 高麗 尽 舞

か*

箋種々の楽、

かくの声つづみのおと 数多きなり

●案に、「かく」は角にて、笛の名にや。「楽の声・鼓の音」とならべみどもの音をばわけて、物を大きにいはんの意にや云々。のおおきなれば、楽とは糸竹をかねいひて、さて有が中にことなるつづのおおきなれば、楽とは糸竹をかねいひて、さて有が中にことなるつづ新 桐壺巻に「琴笛の音に雲ゐをひびかし」と書るは事せばし。今は事

を甚しくい をひびかす」とは、今日の舞楽のにぎははしくて世中へ響くほどの形容 又和名抄音楽の曲調類に「角調曲」といふもあり。考へ合すべし。さて「世用ゐしにもあるべし。かの大篳篥・尺八など交へたるをも思ふべき也。 波良乃布江、小角、 角本出胡中。或云、 はんは心ゆかぬいひざまなれば也。 へる也。 久太能布江」と見えたり。かかる物を楽器に交へて 出,呉越一。以象,龍吟一也。楊氏漢語抄云、 《龍吟」也。楊氏漢語抄云、大角、和名抄征戦具に、「兼名苑注云、

ひと日の源氏の御夕かげ

|細||前に「神など空にめでつべき」と有し事也。其故に誦経せさせ祈禱

はれたる、

などある也 [岷]此事は弘徽殿のの給へる事也。それをみかどの聞しめすべきにあ 如何。試楽の日あまりなるまで見え給ひし故に、 行幸の日は御祈禱

皆当日の事をいふ中に、 などは兼日の事なれど、さしはさみいひて委くする例の文法也。 りて〜かいしろなどといふより当日の事也」といふ注あるはたがへり。 砂岷江の説、 ものねたみし給ふ脈なるを挿みて、 ことわりあるに似たり。 この御誦経の事、 上下の照応としたる也。これによ さて此一段は、弘徽殿女御の例 又舞楽の事定められたること うたが

> げて見ゐ給へり。 行幸には、 みこたちなど世にのこる人なく、 つか

八

う まつり給へ ŋ̈́ 東宮もおはします。 れいのがくのふねどもこぎめ

0) 声、 つづみのおと、 世をひびかす。 ☆帝・ 日の源氏の御夕かげ、 、くさおほかり。 忌**ゆ** 々**ゆ**

しうおぼされて、 みずきやうなど所々にせさせ給ふを、 きく人もこ

とわりとあはれがり聞ゆるに、 東宮の女御は、 アンマリ

み聞え給ふ。 いうそくのかぎり、 ** ッ かいしろなど、 殿上人地下も、 心ことなりと世人に思 宰相ふたり、

ととのへさせ給へ

ŋ̈́,

左衛門督、 右衛門のかみ、 ひだり右のがくの事をおこなふ。 まひの

師どもなど、 世になべてならぬをとりつつ、

かいしろ。

比巴あり云々 舞人の立そひ也。輪台の輪作とて舞台の上にまろく立めぐる也。 河 長秋卿笛譜云、「四十 人之内、有:序二人、破二人、垣代三十六人,云々」。 此時懸

代には地下堂上相交歟云々。 四十 人の数も説々不同

|新||垣代の中には、その舞人も管がたの人もあり。又そのわざなき人々は、 反鼻を打て拍子をとる也云々。

なる故に「かいしろ」といふなるべし。 玉補 三四十 人の人立めぐりて笛ふくさま、舞人のためには垣のごとく

ろしと聞えて、

ふきまよひ、

色々にちりかふ木葉の中よ

青海波

ひしらず吹たてたる物の音どもに、

あひたる松風、

まことのみ山お

んならひ給ひける。

木だかき紅葉のかげに、

四* 十

0

V

代ろ、

V

垣か

いうそく

よろづ大切にするには事心得たる人を侍らしむれば、よそめもるべし。かいしろの管がたなどの外は、させる業にあらずとい |新||此有職とは、 しくみゆる物なれば也。 故実学問のみならず、楽のかたにも心得たるをいふな よそめもおもおも ・ヘども、

のかがやきいでたるさま、

いとおそろしきまで見ゆ。

動がさしの紅葉

「いうそく」はその道に転通なる人をいふと聞えたり。 といふ説よろし。 文字は識字

宰相ふたり云々

亭子法皇五十御賀楽行事、 保忠卿于 時参議右

「宰相」は、 参議の事を唐めかしていふ中古よりの称也。 左唐右高麗の楽事を奉行せらるる也

まひの師どもなど云々

● 係人家の楽師を呼とりつつ、各家に籠り居て稽古せられたるよし也。 「師をとる」とい 、ふ詞、 此頃よりありしにこそ。

木だかき紅葉のかげに

釈これより立かへりて、 また当日のさまをかたる也。

人のかいしろ云々

人のかいしろ」

と読切て、

「いひしらず」とよむ也。

四十

人がみなことことく吹立たるにてはなき也

花|朱雀院には他山ある所也。

秋案に、 「山の」といふことはなき本よろし。 下の「み山」とかさなりてしらべわろく聞ゆ。

衍なるべし。

しのもみぢ

花舞のかざしには、 まことの立木に枝をもをり、 又つくり花をもかざす也。「ちりす っきたる 」 とあれば、是は誠の紅葉と聞えたり

 $\overline{}$

顔の光にけおされたれば、事をとる左大将、菊を折て挿かへられたるよ はんはにつかはしければ也。扨、散過たる紅葉ははえなくて、源氏君のといふ語、聞なれぬ上に、これは十月の十日あまりなれば、「過」とい ☞細流・箋などに「散透」とあれど、猶「散過」の方なるべし。「散透」 し也。用意あるさま也。

見しりがほなるに

一般空のけしきさへ、をりからの風流なる物の感を見しりがほ也、 ろひえならぬを ・ と 也

▼ 菊は露霜にうつろひたるを却てめづるならひ也。故に「えならぬ」

けふは又なき手をつくしたる

またと有まじき秘曲の舞の手を尽し給ふ也試楽の時にもこえたり。

河舞有、取、綾手、故云、入綾。

事によせて、 顕昭注云、「舞には『入あや』とて、さらに取て返しておもしろくまふ |花||俊頼歌云、『郭公二村山をたづね見ん入あやの声やけふはまさると。 『郭公のいりあやの声やまさる』とよめる也云々」。

|湖||ぞつとするほど面白き心也|

物見しるましき下人などの云々

例のほめたるすぢ也。 るなるべし。其中に少しものの心しるは、涙をながして感じる、となり 人どももここかしこのく まぐまに隠れ居て、 ひそかにうかがひ見

承香殿の御腹の四のみこ

誰ともなし

秋風楽

河盤涉調也。

1 和名抄云、 「秋風楽、 古老伝云、 弘仁天皇幸;南池院;之日、 初ヶ奏ス

かへりてはことざましにや

 \wedge いたうちりすぎて、 なる菊ををりて、 ☆ 気 E かほのにほひにけおされたる心ちすれば、 左大将さしかへ給ふ。 日くれかかるほどに、 おま +け

トリ *ド 空のけしきさへ見しりがほなるに、 さる

_{ウックシキ} いみじきすがたに、 きくのいろいろうつろひえならぬをかざして、

このよの事ともおぼえず。 物見しるまじきしも人などの、 木のもと

今日、フタットナィ手けふはまたなきてをつくしたる、

いりあやのほど、

ッットスルホド ・*

った。 におがくれ、 山のこのはにうづもれたるさへ、すこし物の心しるは、

なみだおとしけ Ď |承香殿の御はらの四のみこ、ショョウキキンテン まだわらはにて、

秋風楽まひ給へるなん、 △源/2 次 なしつぎの見ものなりける。 これらにおも

しろさのつきにければ、 こと事にめもうつらず、 か* へりてはことざ

白からずなれる事をさしていふ也」。 |余朗云、「『ことざまし』 といふは、 源と四の御子とによりて、 外の

その夜源氏の中将云々

花 延喜御記云、 「貞観以来、 奉」賀時有「叙位之例」」。

巴|従より正になり給へり

●加階とは、位の階を加へ給ふこと也。 細一級。正四位下」也。今まで従四位上也。

さるべきかぎりのよろこびし給ふも

細源氏君にひかれて各昇進し給ふと也。 |湖||昇進のよろこび也。

昔の世ゆかしげ也

細源の前世のゆかしきと也

げ也」とはいへるなり。 前世にいかなる因縁のあるにや、 ₩仏説には、すべて此世の幸も皆前世よりの宿業とする故に、この源 人の目をも驚かし、心をもよろこばせ給ひてあかぬ事なきは、には、すべて山世の暑ま生皇十

宮は其比まかで給ひぬれば云々

細藤壺の里亭へ退出也。

などいふがごとし

|岷||藤つぼの御あたりをうかがひありき給ふを仕事にして也。「ことをや

さわがれ給ふ

|湖| とかくいひさわぐなどいふ心也。源の藤つぼの事故無音なれば也。

いとどかのわか草云々

|岷||私云、藤壺の事をばしらず、 玉補「いとど」といふこと、 下の「おぼいたり」へかかれり 思ひうたがふ也。是は若紫巻にむ何事に疎遠なるぞと思ふに、二 にむかへと

り給へる時分の事験 人むかへ給ふを、 さやうの事と思ひうたがふ也。

うちうちのありさまは

かくおぼすもことわり、 と也。

ましにやありけん。 その夜源氏の中将正三位し給ふ。 頭中将正下の

かか 階 し給ふ。 かんだちめたちは、 みなさるべきかぎりのよろこび

し給ふも、 此君にひかれ給へるなれば、 人のめをもおどろかし、 心

をもよろこばせ給ふ、 昔の世ゆかしげなり [客はそのころまかで給

ひぬればれいのひまもや、 〜、とうかがひありき給ふをことにて、 おほ

V 殿にはさわがれ給ふ。 ۱v* とどかのわか草たづねとり給ひてしを、

一条院には人むかへ給へ る なりと人の聞えければ、 **いと心づきなし**

とおぼいたり。 **うちうちのありさまはしり給はず、** さもおぼさんは

紅葉賀

べからんふしをも、にくからずかすめなさば」といへるに思ひ合すべし。|湖師||帚木に「ゑんずへき事をば、みしれるさまにほのめかし、うらむさやうにだになくば、他人にわくる心も有まじき物を、と也。

思はずにのみとりない給ふ云々

秋葵上の案外に打とけず しのびありきなどもいでくる、と也。夫婦のあひだの情、げにかくの もてなし給ふ心づきなさにより、 さは有まじ

|岷|源の元服の夜よりのそひぶしなれば也。

心をもしり給はぬほどこそ

か意得ざる時は、前の文と違ふなり。初めたる時はいふにも及ばず、今もなほ源の心を知給はぬをいふ也。し |新||或説に、はじめ源の心をしり給はぬ程こそといへるはいかが。 いと

おだしくかるがるしからぬ

なん、 るは、例の文法也。 るるかたは、猶人よりはこと也、となり。さて、つひにはおぼし直され ● 葵上の本性穏かに軽々しからねば、おのづから思ひ直り給はんと憑 と憑るる」と続く語脈なる中に、かねての本性の故を挿みてかた

をさなき人は云々

又俗語「ありつく」 玉補「見」はあひ見る也。 などの「つく」 **〜つく」といふ詞、「すみつく」「語らひつく」、** 也

とのの内の人にも

はなれたるたいに

|岷| はじめてむかへ給ひし時より住給ふ二条院の西の対なるべし。「こな たは住給はぬ」所と前にも有。

> ことわりなれど、心うつくしく、 ッ* れいの人のやうにうらみの給はば、

渡 オクソコナク 語 おもうらなく打かたりて、 なぐさめ聞えてんものを、 思はずにのみ

製成 とりない給ふ御心づきなさに、 さも有まじきすさび事も出くるぞか

ل و **※** 人の御有さまのかたほに、 **其ことのあかぬとおぼゆるきずもな**

人よりさきに見奉りそめてしかば、 あはれにやん。ことなく思ひ ィなきかたに

聞ゆる心をも、 しり給はぬほどこそあらめ、 竟 △奏△ 直 ○

れなん、 とおだしくかるがるしからぬ御心のほども、 おのづから、

いとよき心ざまかたちにて、

何心なくむつれまつはし聞え給ふ。

ばしとのの内の人にも、 たれとしらせじとおぼして、 猶はなれたる

た対い に、 御しつらひになくして、 源 明 幕 ス われもあけくれいりおはして、

ろづの御事どもををしへ聞え給ふ。 てほんかきてならはせなどしつ

をしへ聞え給て本かきて

がこと也。万水に「手本」とあるによるべし。かきて」と湖月によめるはひ

ただほかなりける御むすめを、 むかへ給へらんやうにぞおぼし

たる。 まん所けいしなどをはじめ、* ことにわかちて、 シッカットクジュウナク

ずつかうまつらせ給ふ。 惟光よりほかの人は、 おほつかなくのみ思

ひ聞えたり。 かの父宮もえしり聞え給はざりけり。 姫君は猶ときど

き思ひいで聞え給ふ時は、 恵ま君をこひ聞え給ふをりおほかり。

のおはするほどは、 ^{△汕ラ ラ カ シ} よるなどは、 時々こそとま

〜給へここかしこの御いとまなくて、 くるれば出給ふを、 したひ聞

え給ふをりなどあるを、 いとらうたく思ひきこえ給へり。 二三日内

惟光より外の人は

の衆までを各別に定置給ふ也。

河政所・家司。

|岷||家中をとりおこなふもの共也。しかるべき家々にはある也。さやう

|箋||家司の中にも惟光ばかりならではこの事をたしかにしらざる也|

取尼君をのみいひて父君をいはざるは、 前の巻の脈也

にさぶらひ、 大殿にもおはするをりは、 いといたくくしなどし給へ

あやしき物から

かまだいはけなき人をかくかづき給ふをあやしく思ふ物から、 しとおぼす也。「あやしき」の詞、 いとよろし。 又う

なくおぼえ給ふ。

僧都はかくなんときき給ひて、

ラシギナモノノ あやしき物から、 *

ば、

心ぐるしうて、

ははなき子もたらん心ちして、

ありきもしづ心

かの御法事など

山の尼君の百ヶ日なるべし

れ

しとなんおもほしける。

かの御法事などし給ふにも、

△源ヨリ〕厳し

|岷||此法事は僧都のし給ふを源のいかめしくとぶらひ給ふ也。

砂比段、父宮の未だえしり給はぬに僧都の先聞給へるは、尼君の縁な

いかめしく」とは、贈物供物などのにぎははしきをいふなるべし。 小反覆の筆也。

うとぶらひ聞え給へり□藤つぼのまかで給へる、三条の宮に、

御あ

藤壺のまかで給へる云々

はじめ藤壺の事をいひさして、却て紫上の事にわたり、 再び説おこされたるは、 筆を間隔したる例の文法也 ここに至り

けざやかにももてなし給ふ哉

●藤つぼみづからたいめし給はずして、 女房たちのみ出して外ざまむ

やうの人々、

たいめしたり。

サッパリト けざやかにももてなし給ふかな、 *+

とや

からず思ひ給へど、

しづめて、

ッウレィの御物語きこえ給ふほど

りさまもゆかしうて、

参り給へれば、

命婦、

中納言の君、

中務など

きに清く物し給ふを安からず思ひ給へど、さる心を静めて、 と也。

女にて見んは

|細||我を女にて兵部卿を見ばや、 と也。

絶の筆といふべし。心をつくべし。 此所、源氏君も兵部卿宮も互に女にて見んとおぼしたるとある、 奇

> し給へ ŋ̈ いとよしあるさまして、 この君おはすときき給ひて、 色めかしうなよび給へるを、 女*

に、

兵部卿宮まゐりたまへり。

たいめ

かたがたむつましう 砂心の中に也。

▼女にて見まほしく思ひ給ふ上に、紫上の父、藤壺宮の御兄なれば、 かたがたむつましう覚え給ふ也。旧注たがへり。

むこになどは

玉補一本「むこに」とあるぞよき。

色の心より女になりて見たき、と也。
「孟」紫を源のとりて置給ふとはしり給はで、源のうつくしきにつきて好

いとめでたし、

と見奉り給ひて、

がこになどはおぼしよらで、

女に

● 「聟になどはおぼしよらで」と下にほのめかしたる筆つき、 いとめ

みすのうちに

|細||藤壺のおはする簾中へ兵部卿宮の入給ふ也

昔は上の御もてなしに 中へもめし入し事を思ひ出て、あぢきなくおぼす也。|岷| 桐壺の帝の、源のをさなくおはしまししほどは、

藤壺のおはする簾

小今となりては、人ぎきをいたく憚り給ひて藤壺の疎々しくし給ふを、 れなくおぼさるる、と也。「わりなき」とは、憚り給ふがことわりなるに、

かく源氏のおぼえ給ふは、無理にてくるしき意也。

しよなううとみ給へるも

ことぞと侍らぬほどは |孟|さしたる事なき時はおのづからおこたりし、 と源の詞也

> にて見んはをかしかりぬべく、 人しれず見奉り給ふにも、 △紫/コトト〕 ・ かたがた

むつましうおぼえ給ひて、 こまやかに御物がたりなど聞え給ふ。 兵部卿宮

もこの御さまの、 つねよりもことになつかしう、うちとけ給へるを、

て見ばや、 といろめきたる御心にはおもほす。 ^存 くれぬれば、 、 みすの

内にいり給ふを、 うらやましく、 ** ** ** ** V

とけぢかく、 △麟ションン公人で物をも聞え給ひしを、 こよなううとみ給

、るも、 **つらうおぼゆるぞわりなきや**。

事ぞと侍らぬほどは、 おのづからおこたり侍るを、 さるべき事

などは、 おほせごとも侍らんこそ、 うれしくなど、すくすくしうて

ありしよりはいとどうきふしに

はづかしういとほしければ |湖||懐妊より後は源に媒の事をいよいようきものに思ひ給ふ也。

|岷|命婦が心に藤壺の御心を恥思ふ也

何のしるしもなくて

▼源氏君の命婦を頼み給ひししるしもなき也。
湖源の藤にあふひまもやとうかがひありき給ふしるしもなき

はかなの契や

也など定めたる説はいかが。 「かたみに」とあれば、 相互にはかなく思しみだるる也。源也、 藤

少なごんは云々

葵巻へ貫きたり。心をつけてよむべし たる文法也。其中に大殿のことを挿みたるは、上の巻々よりの脈にて、 かすべて此巻は、藤壺宮の事を主と語る中に、紫上の事を互にまじへ 細]是よりまた紫上の事をいふなり云々。

ひ給へる御覚えのさまを見てたのもしく思ふ也。かしこき乳母などのお ♪「おとなになり給はんには、方々の物ねたみなどにて物むつかしき事もの。」を上貴くておはし、又源氏君ここかしこかよひ給ふ所多ければ、紫 もはんやうをいとよく写し出されたり。 や出来んと、少納言おもひあやぶみながら、さしあたりてかう格別に思

御ぶく母方は三月こそは

参り給」と有。尤十二月可、然なり。 |細||花鳥に「此除服十一月晦日」と有、いかが。九月より||河||服忌令日、祖父祖母、父方者暇三十日服五月、母方暇二十 十二月に及ぶべし。然らば十二月晦日なるべし。末に「男君は、 君は、朝拝に すかぞふれば 干日服三月。

妨ながるし。 秋弄花に「紫の祖母、 月二十日比なるべし。晦日に除服と有は、日をえらび給ふにや」といへ (る也。下旬をすべてつごもりといへる例なれば、二十日余りと見てこれは「つごもり」とあるを、正しく晦日の事と見たるよりうたが 逝去は九月二十日のほどとあり。

> 出給ひぬ。 命婦もたばかり聞えんかたなく、 宮の御けしきも、 あり

しよりは、 いとうきふしにおぼしおきて、 心とけぬ御けしきも、 は*

づかしういとほしければ、 なにのしるしもなくてすぎゆく。 はかな

の契や、 とおぼしみだるる事、 **かたみにつきせず**]少納言は、 この御事をお オモビ

ガケズ オモシロキ 世界 △コト

これもこあまうへの、

ぼして、 御おこなひにもいのり聞え給ひし、 仏の御しるしにや、

おぼゆるに、 大殿いとやんことなくておはし、 ここかしこあまたか

かづらひ給ふをぞ、 実 会業 まことにおとなび給はんほどは、 むつかしきこ

ともや、 △出来ン とおぼえける。 されどかくとりわき思ひ給へる御おぼえの

ほどは、 いとたのもしげなりかし◎御ぶく、 ははかたは三月こそは

またおやもなくて云々

ぎり織るに、うちきに着かへ給ふ也。これ源氏君の御用意なるべし。 おひたち給ひしかば、祖母君の恩ひとしほ深し。故に服をばぬぎ給ひて ●紫上は母上にははやくはなれて、祖母君の外にはまた母親もなくて もまばゆき色の紋ある衣をば着給はず、ただ紅・紫・山吹などの地のか

地のかぎりおれる

てふ説はわろし。 ゆれば、色といふにもここは紋なき色をいひたれば、 あるは猶まばゆきなれば、「まばゆき色にはあらで」といふも紋なきと|新|紋のなきをいふ也。紅・紫・山吹など色は上なけれど、それに紋の いふこと明らか也。且禁色といふには織物もかぬること、式の文にて見 「うす紅なるべし」

べし。 織て紋のなきといふ意也。 (別) 「地のかぎり」とは、 あらて」とあるは猶色の事にて、 旧説ひがことにはあらず。 紋なき所を地といふべし。その地のかぎりに テにて、紅・紫・山吹ともにうすきをいふなる新釈の説さることながら、「まばゆき色には

てうはいに

|花||朝拝は正月朔日の小朝拝をいふ。朝賀にはあらず

|弄||正月朔日の小朝拝、

延喜五年被」「停」「止之」。同九年又行」之。:ロの小朝拝、清涼殿の前庭に諸臣拝す云々。 依, 群臣請 也

||低||年こえてやがてなれば「いつしか」といへり。

▼ 「おとなしくなり給へりや」とのたまへるにつきて、猶幼きさまを はんとて「いつしかひいなおしすゑて」とはいへるなり

|河||追儺十二月晦日也。鬼やらひの事也。

|箋||此ひな屋にて追儺のまねをしたる也。

北山にて雀の子にがしたるいぬき也。 |**岷**| ^{岡書}晦日にある事也。そのまねを今日したる歟、又よべこぼちたる歟。

■箋・岷江の義、いづれにてもあるべし。 れたる照応、 いぬきが麁忽を再びとり出

> とて、 **つごもりにはぬがせ奉り給ふを、** 又おやもなくて、 おひいで

給ひしかば、 ヒカルヤウナ くれなゐ、 むらさき、 山ぶき

Q **ぢのかぎりおれる、** 御こうちきなどをき給へるさま、 いみじう

いまめかしくをかしげなり。 をとこ君は、 朝拝に参り給ふとて、 方さ

しのぞき給へり。 けふよりはおとなしく成給へりや、 とて打ゑみ給

 \wedge いとめでたうあいぎやうづき給へ り。いつしかひいなおしす

居ゑ て、 ナブリ そそきの給へり。 三尺のみづしひとよろひに、 しなじなしつ

らひすゑて、 ヌ ホ 屋 作 集 またちひさきやどもつくりあつめて、 奉り給へるを、

所せきまで、 あそびひろげ給へ り。なやらふとて、 の。なやらふとて、 いぬきがこれを

打こぼち侍りにければ、 つくろひ侍るぞとて、 いと大事とおぼいた

けふはこといみして

細正月一日なれば也

ひいなの中の源氏の君

て、

^{لا}ل

なの

なかの源氏の君つくろひたてて、

孟ひいなの中にて源氏と定めて遊び給ふ也。

若紫の巻よりこなた引もて来れるひいなの脈也。心をつけて味はふ

うちにまゐらせ給ふ

|湖| ひいなにて参内のまねびをし給ふ也

今年だにすこし 湖師紫の、 年よりはをさなくおはせば、

あるべかしう |湖||北方などいひつべくおとなしくしてこそ源にもまみえ給ふべきに、

かく申す

さめ申す也。 向にをさなくて、 髪ゆふほどだに只は居給はぬと、 紫のをさなきをい

御あそびにのみ心いれ給へれば

|岷||少納言がいひつる事を釈していへる詞也。「はづかしと思はせ」とは、 け給ひては、といふこと也。

人々の

|湖||少納言なとの夫は形などよろしからぬ、 と世

> り。 げ調 け* に いと心なき人のしわざにも侍るかな。 いまつくろはせ侍ら イいとナシ

ん。 ふはこといみして、 草 泣 なない給ひそ、 とて出給ふけしき、

所せきを、 人々はしにいでて見奉れば、 姫君もたち出て見奉り給ひ 物にまゐらせなどし や

給ふ。こと ことしだにすこしおとなびさせ給へ。
*少納言詞 +歳とをにあまりぬる人は、

 \mathcal{C} 1 なあそびはいみ侍る物を。 かく御をとこなどまうけ奉り給ひて

は、 あるべかしうしめやかにてこそ、 みえ奉らせ給はめ。 御ぐしま

ゐるほどをだに、 タイギニ Aコトヨ ムコトヨ 少納言きこゆ。 御 あ み そ

戯び に の み心いれ給へ れば、 はづかしとおもはせ奉らんとていへば、

心のうちに、 われはさはをとこまうけてけり。 こ* の 人々の男とてあ 少納言又女房タチナド也

るは、 みにくくこそあれ。 我はかくをかしげにわかき人をも、 も 持た

ŋ けるかな、 と今ぞおもほししりける。 さはい へど御としのかずそ

ふしるしなめり かしったした。 かくをさなき御け ゥは 7 V Ŏ 事 触 著

とはおもはざりけり ┃ うちより ッ大殿にまか っ

で給へれば、れいのうるはしうよそほしき御さまにて、 ーキネヘゥ *キサー 心うつくし

き御け しきもなく、くるしければ、ことしよりだに、すこしよづきて、

あらため給ふ御心見えば、 いかにうれしからむなど聞え給へど、 △奏? △葵ハ源ノ」

だと人すゑてかしづき給ふ、 と聞給ひしより ラり は、 やんことなくおぼ

しさだめたる事にこそは、と心のみおかれて、 いとどうとくはづか

今ぞおもほししりける

|湖||今までは源の子のやうにおぼしたるなるべし

ども、是ほどの心得もゆきたるは、 |岷||此詞、草子地なり。「さはいへど」とは、あそびにのみ心をいれ給 年の数そふしるしと也。

かくをさなき御けはひの云々

よづかぬ をさながましきをききて不審に思ふなり |岷| 人にしらせじと源のし給へど、 おのづから二条院にさぶらふ人々も

よへず」 などいふ、

|新||よをしるとは男に逢たるをいふ。

後撰の歌、

いせ物語などに「まだ

ければ、

とののうちの人々も、

カシャしと思ひけれど、

いとかうよづ

うちより大殿に (駅) ここより葵上のかたの事を挿めり。 例の脈にて、 且間隔の法也

のうるはしう

粧ひのことごとしき也。「心うつくしう」は、なつかしく愛らしき♪「うるはしう」は、打とけずきッとしたる顔、「よそほしう」は、 しき也。 形

すこしよづきて

● ここは、男女の情をしりて、といふ意也。「あらため給ふ」は、 したるを改め給ふ也。 きと

わざと人すゑて

給ひしより、格別におぼしめし定めたる人ならんと心おかれて、いよいに近し。二条院にかりそめならずわざわざ人をすゑてかしづき給ふと聞いわざと」は、わざわざの意にて、かりそめならず格別に、といふ よ疎遠に隔心し給ふなるべし、 と也。

しひて見しらぬやうに

だれてのたまふ御けはひにはさすがに心づよからず、相応に返答し給ふうにもてなして、源氏君の「ことしよりだに、すこしよづきて」などみ 秋此一句は、なほ葵上の事也。 もじにさはりて聞ゆ。ここは、二条院の事を、葵上のしひて見しらぬや らぬやうにもてなし給ふごとく釈れたるは、 猶別人よりは異也、 といふ意也。 釈れたるは、「御けはひには」とあるは、諸抄、源氏君の、葵上のけしきを見し

しくおぼさるべし。**

しひて見しらぬやうにもてなして、

、みだれたる

四年ばかりがこのかみに

|細||源は葵より四年ばかりおとりなり

|岷| 桐壺巻に「女君はすこし過したるほどにて」とあり

何事かは此人の

※この注を含む文が抜けているため、 分にたらひて、不足の所は物し給はぬ也。 湖月抄で補っ

た

とかは、

わか心のあまりけしからぬ

おなじおとどと聞ゆる中にも 御心おごりも格別にて、源の少しも麁略あればめざましと思ひ給へる、はする、其嫡妻の宮の御腹に只ひとりいつきかしづき給ふ葵上なれば、 大臣は同じ大臣なれども、其中に此左大臣はおぼえやんことなくお 好色のすさび也。それ故葵にもうらみ奉らるるよ、と思ひしり給ふ也。 |湖師||源の、葵のやうなる人を置てほかに心をつくすは、 よからぬ事の

ぬすさびに、

かくうらみられ奉るぞかし、

とおぼししらる。

御けはひには、 えしも心づよからず、 御いらへなど打聞え給へるは、

なほ人よりはいとことなり。 四歳よとせばかりがこのかみにおはすれば、

打すぐしはづかしげに、 さかりにととのほりて見え給ふ。 (なにご

お 同 な じ

この人のあかぬ所は物したまふ。) 我心のあまりけ

しから

おとどと聞ゆるなかにも、
ィなかけら おぼえやんことなくおはするが、 著
月
母
君
ら

^独 にひとりいつきかしづき給ふ御心おごり、 いとこよなくて、 すこし

もおろかなるをば、 めざましと思ひ聞え給 へるを、 をとこ君はなど

ァか サウハーラケミシェナギのいとさしもとならはい給ふ御心のへだてどもなるべし。 左 大 臣 と ど も

べし、と地より評じたる也。おぼして大かたにしならし給ふより、 ₩ 葵上の御心おごりを、源氏君は「などかさばかり貴からん」などと 互に御心のへだてとも成レるなる

き」。「ならはし」を「はい」といふは音便也。らはい給ふをいふ也。竹取物語に「かくたいだいしくやは、ならはすべ |玉補| 「ならはい給ふ御心」とは、源氏君も又御心おごりにみづからな

見奉り給ふ時は

|細||打むかひては恨をも忘れ給ふ也

なこれ例の源氏君をほめたる脈也。

|湖||元日の夜はおとどにとまり給ひて、 二日の早朝也。

名だかき御帯

を用れば也。 **箋** 当官三位中将也。 花]今案に、昔名ある玉帯には落花形、鴛鴦、通天、など名ある物有し也。 はじめて玉帯を用ゐらるべし。 四位の間は碼碯帯

てづからもたせて

御その御うしろ |玉||もたせてわたり給ひて、手づから御その御うしろ云々、とつづく意也。

いとあはれなり |湖|源の装束のうしろなどの衣紋つくろひ給ふ也

那始沓をとらぬばかりにし給ふは、 は、それを評じて「あはれなり」とはいへる也。 皆葵上の事を思ひ給ふ御親心な

これは内宴など

|岷| 「内宴」と申は内々の節会也。仁寿殿にて行はる。 今日のためには過分也とて斟酌し給ふ也 文人題を給はり、

それはまされるも侍り と也。珍らしき帯なれば参ら

詩を作りて、やがて御前にて講ぜらる云々

|湖師||其時は又これよりまされるもあり、 と世

げによろづに云々 に生るかひあり、たとひたまさかにとひ給ふともこれにます事あらじと きたてて見奉り給ふに、むこなどいひて我かたに出入し給はんはまことらみもわすれて云々」とある脈をうけて「げに」とはいへる也。かしづい。」がに」は「いけるかひあり」へ係る意也。上の≦見参り給ふ時はう

参座しにとても

見え給ふ源氏君の御ありさまなり、

との義也。

河参座、 一元日参賀の事也

> かくたのもしげなき御こころを、 つらしと思ひ聞え給ひながら、 △又源ヲ**」 見***

奉り給ふ時は、 うらみもわすれて、 かしづきいとなみ聞え給ふ。

/翌早朝台源/ 会長E 会長E △瀬乙 御さうぞくし給ふに、 名**巻**

き御おび、 御てづからもたせてわたり給ひて、 御^{*} まそ の御うしろ引つ

くろひなど、 御くつをとらぬばかりにし給ふ、 いとあはれなり。こ

れは今宴などいふことも侍なるを、 さやうのをりにこそ、 △腸ハラメ」

給へど、 それはまされるも侍り ^{〈ナホ} $(^{\circ})$ これはただめなれぬさまなれ

ばなんとて、 しひてささせ奉り給ふ 並 \bigcirc **ずによろづにかしづきた**

てて見奉り給ふに、いけるかひあり、 たまさかにても、 かからん人を、

春宮朱雀院。 一院准寛 桐壺帝尊親也。

那准拠は例の大かたに見るべし。

●年たけてねび給ふままに御形の成勝り給ふ、 と也。

この御事の

に御産はありし也。 通し給ふ。三月よりは、 となるべし。しかれば正月にあたれども、 |花||藤壺の御産の事也。去年の三月に藤つぼ御里居し給ひて、源氏の君 十二月は十月にあたれども、誠は四月よりのこ 持こさるるほどに二月十余日

|弄| 源密通は四月也。御門の御子なれば三月よりなるへき心也。正月は「さ () と思ふ也。

御物のけにやと

|岷| 御懐妊の事も、御物のけのまぎれにおそく見つけたるよし奏したり と前に見ゆ。※若紫四十七ページ。

宮いとわびしう云々

はてぬべきことよとまでおぼしなげく故に、御心もいとどくるしくてな思ひわづらひ給ひていとわびしく、此事の物思ひによりていたづらに死 やみ給ふ也。 「御もののけにや」など世人もいひさわくを聞給ひて、 密通の事を

|花||後撰\|あはれともいふべき人はおもほえで身のいたづらになりぬべき

月のび給ひて正月も過ぬるによりて、いよいよ然也と思ひあはせ給ふむ玉」源氏君の、藤壺の御懐妊をわが御たねならんと思ひ疑ひ給ひしに、 いよいよ然也と思ひあはせ給ふな

御ずほうなど

細此時の祈ども薄雲巻に見えたり

正補す もじにごるはわろし。

砂猫にごる方、 昔よりのよみざまにてよろ

> あまたところもありき給はず、 内春宮一院ばかり、 さては藤つぼの

三条の宮にぞ参り給へる。 けふは又ことにも見え給ふかな。 年 ね び 給

ふままに、 ゆゆしきまでなりまさり給ふ御ありさまかな、 と人々め

メで 聞ゆるを、 選は御几丁のひまより、 宮は御几丁のひまより、 ほの見たまふにつけても、 お

もほす事しげかりけり◎この御事の、

+ ニ 月

きに、 この月はさりとも、 とみや人もまち聞え、 藤/宮人也 内にもさる御心ま

うけどもあるに、 つれなくてたちぬ。 つれなくてたちぬ。 御物のけにや、 と世人も聞え

さわぐを、 宮いとわびしう、 一事により、 身のいたづらになりぬべ

き事、 슬 とおぼしなげくに、 御心ちもいとくるしくて、 なやみ給ふ。

中将の君は、 ィョィョ 御ず法などわざとはなくて、

世中のさだめなきにつけても

それをさへとりそへて思す也。 なくなどもなり給ひては、またかさねての対面もなくてややみなんと、 |岷||源の心と見て然るべし。御産の時いかやうの事もありて藤壺のはか

ひに逢ことなくて止んの意也。さらによしなし。「やみなん」といふに心を付べし。「やみなん」は、さらによしなし。「やみなん」といふに心を付べし。「やみなん」は、 ▼おおおおいます。
※・細流・湖月・新尺など、藤壺の心と見られたるは、 つ

をとこ御子生れ給ひぬれば

脚後に冷泉院と申也

なごりなく内にも宮人も

に「内にも宮人も」とある、首尾ととのひて、かつあやあり。 は藤つぼの也。上に「宮人もまちきこえ、内にも云々」とありて、 「なごりなく」は、思ひ歎き給ひしなごりなく也。「内」は帝、「宮人」

いのち長くもとおぼすは云々

をいふ。 にて、 しづつひだち給ふ、と也。「うけはしげ」は、河海に呪咀とある字の意 なし給はば、人わらはれならんとやうに思ひはげみ給ふつよみより、 の事をうけはしげにの給ふと聞給ひて、もし空しくなりしと弘徽殿の聞 ば心うくて、空しくならばやとはおもほす物から、弘徽殿などの此御産 ₩藤壺の御命長くもあれかしと帝のおもほすは、 のろはしげといふがごとし。「さはやぎ」は、 上に「御心ちもいとくるしくてなやみ給ふ」 かの密事の故を思へ 病のよろしくなる 少

いつしかと

湖いつか若宮を御覧ぜん、

|岷| 人のなき間に也。三条の宮へなり

むつかしげなる 実はいふせきにあらず、 |湖||みこの生れ給ふきははいぶせくあるとて、藤の源に見せ給はぬ也。 源によく似給へるをはぢ給へる也

> ころどころにせさせ給ふ。 世中のさだめなきにつけても、 かくはか

なくてややみなん、 ととりあつめてなげき給ふに、 二月十よ日のほ

どに、 をとこみこ生れ給ひぬれば、 なごりなく、 内にも宮人もよろ

こび聞え給ふ。 いのちながくも、 Affth A帯としますは心うけれど、 弘徽殿

などの、 **うけはしげにのたまふとききしを、** 空〜〜ナリヌト」

しかば、 人わらはれにや、 すこしづつさは *

復や い給ひける。 **うへのいつしかと、** ゆかしげにおぼしめしたること

かぎりなし。 かの人しれぬ御心にも、 いみじう心もとなくて、 人* 問ま

にまゐり給ひて、 う源詞 へのおぼつかながり聞えさせ給ふを、 ^先 見奉

りてそうし侍らん、と聞え給へど、 **むつかしげなるほどなればとて、**

四四

うつしとり給へるさま

|湖||あさましきまで源のかたちをうつしたるやうに似給へば、 たがふべくもなき、 源の子に

吋、そらおそろしく思ふ心歟。 心におそろしく思ふこと也。

人の見奉るも云々

まさに人の思ひとがめじやは 後に懐妊し給ひし事をいふ也。 玉補]此事は若紫巻にあり。 藤壺の宮おりる給ひて、 一たび月事ありて

|湖| かやうに源に似給へば人も推量をやせんと、

人のしらぬ事まで思ひ

きずをもとむる世に

「やは」のはもじ、

諸本になし。

万水によりて加へ

あり。 |余||前漢書十三王伝「今或無¸罪為,]臣下,所,]侵辱,、 人のあらきさがを見出さんとするを云。 有司吹、毛求、疵」 ۲

身のみぞ

釈我御身ばかり心うき、

命婦の君に云々

●藤つぼの御心上のごとくなれば、酒 源氏君の、 と也。 命婦に逢給ひて様々に

わか宮の御事を云々

思へるけしき云々 秋若宮をとく見奉り給はんとの給へど、 くまであながちにいそぎ給ふべきとて、 今自然に見奉らせ給はんを 命婦うけがはぬ也。

ことなれば、かたにみただならず、と也。 | 湖師] 命婦が心にも、源の御心を察して哀に思ひやり参らする也。 、命婦も心にのみ思ふやり参らする也。口に

いかならん世に

●この歌は類例也。引歌には及ぶべからず。いかなる世にあひてか、 拾一後撰、いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君にきこえん

ただに藤壺にたいめんして此事どもをもいはん、 とてなき

> みせ奉り給はぬもことわりなり。 さるはいとあさましうめづらかな

るまで、 うつしとり給へるさま、 まが ふべ 、 くもあらず。 宮の御心の**

おににいとくるしう、 人の見奉るも、 あやし かりつるほどのあやま

ちを、 ドウシテマイモノカとがめじやは。 サウモナイチョットシタデモ、 _疵き[>]

ずをもとむる世に、 いかなる名のつひにもりいづべきに か、 とおぼ

つづくるに、

身のみぞいと心うき。

 ∇ て、 いみじき事どもをつくし給へど、 なにのかひ有べきにもあら

ゎ゚ か宮の御事を、 わりなくおぼつかながり聞え給へば、 などか

うしもあながちにの給はすら \dot{k}_{\circ} ******いまおのづから見奉らせ給ひてん、

と聞えながら、 思へるけしきかたみにただならず。 かたはらいたき

隔ぞ、といふ意をもたせたるにや。 める。子を思ふやみの心也」と有。もし此意あらば、子の世にまで係るみ給ふ也。さて命婦が返歌にも『こやよの人のまどふてふやみ』とはよ 動前世にていかさまに結べる宿縁なれば、此世にかやうなる中のへだ はあるやらん、と也。花鳥に、「『この世』は、若宮の御事をそへてよ されど猶此歌なるはおぼつかなし。

かかる事こそ

細一何とも心得がたき契り、

|湖師||子もある中なるに、と也|

宮のおもほしみだれたる云々

|湖||藤もさすがに源を思ひもはなち給はぬけしきなれば、 なくもえせぬ也 命婦もはした

見ても思ふ云々

細命婦の歌也。「みても」 とは藤つぼの事也。「見ぬはた」とは源也。

どふやみといふらんがことわりに侍り、といふ也。「人のおやの心はや氏君もまたいかになげき給ふらん、げにいづれにしても、子は世人のま 花鳥の御説のごとく、此歌は「此や」に「児や」をかねたりとおぼし。 みにあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな、 首の意は、御子を見給ふ藤つぼも御物思ひはただならず、 の意也。 見給はぬ源

かたみに御物思ひのゆるむ時なきがあはれ也、 との意なり。

|岷| 源のここへおはして、 のみいひやるかたなくて 命婦には時々あひ給へども、

何のかひもなく

人も物いひもわづらはしきを云々

てかへり給ふものから也。

時も有べきを、命婦は案外なる事に思ふべし、と傍より評じたる也。 つましうし給はず、さりとて人目にはたつまじく平穏にもてなし給ふものものいひさがなきを迷惑におぼして、命婦をもそのはじめのやうにむ∰源氏君はいひやるかたなくて空しくかへり給ふ物から、藤壺は世人 のの、かの御中の事をいひかけなどする故に、心づきなきやうにおぼす めで

一此所、藤壺のくるしき情をいとよくうつされたりとおぼえて、

事なれ ば、 まほにもえの給はで、 ()* かならん世に人づてならできこ

えさせんとて、 ない給ふさまぞこころぐるしき

ド**し、**※ ノャゥニ # *** おさまにむかしむすべる契にてこの世にかかる中 0) へだてぞ。

かかることこそ心得がたけれ、 との給ふ 命婦も宮のおもほしみだ

れたるさまなどを見奉るに、 モギドゥニモ 放 な う も さ し は な ち 聞 え ず

見ても思ふみぬはたいかになげくらんこやよの人のまどふてふや*゚゚婦

 \mathcal{F}_{\circ} あ はれに心ゆるびなき御事どもかな、 とし リカニのびて聞 **り**。 ^草

ゥバカリ ☆か ○ ○ ○ へ り給ふ物から、 ☆藤人 へのもの いひもわ

づ らは しきを、 **わりなきことにの給はせおぼして、** 命婦をも、 ソ**むか**

とおぼいたりしやうにも、うちとけむつび給はず。 人めだつまじう、

四月に内へ参り給ふほどよりは大きに云々

別に起かへり」とは、我別に表すのである也。 我とはねおき給ふなり

あさましきまで

細源によく似給ふ也

又ならびなきどちは

細ならびなくうつくしき人のをさなだちは、 いづれも同じ物と思ひ給

けにかよひ給へる

び給へる」といふにや。けしきの似たる意也。び給へる」といふにや。けしきの似たる意也。といふ也。正□「げに」はうくる所なし。もしくはげもじ衍歟。 または「気に似

源氏の君をかぎりなきものに

坊にも 歌 「かぎりなき物」とは、 し聞ゆまじかりし」とは、彼貴きすぢの御後見なき更衣腹の故をいふ也。 かきりなく寵愛し給ふをいふ。「世の人のゆ

釈源氏を東宮に立給はざり し事をくちをしくおぼすなり。

ただ人にて

駅 この 「ただ人」は、 君に対して臣下の事をいへり

かうやんことなき御はらに

若宮御誕生にて、 |孟||源の、年たけ給ふにつけてただ人になされしを御後悔の所に、この 母も藤壺の宮なればきずなき玉、 と御門の御心なり

> ヘ ィ ♯ = なだらかにもてなし給ふ物から、 キニクハヌ いづきなしとおぼすときも有べき

△命婦ハ〕メイワクニ 思ひのほかなるここちすべ 四月に内へまる

り給ふ。 ほどよりはおほきにおよずけ給ひて、 ソロソロ 起 返 ŋ

まモノッブレタホド ・ まぎれ所なき御かほつきを、 金部にし

こそは、とおもほしけり。 またならびなきどちは、 いみじうおもほしかしづく事かぎりなし。 ポにかよひ給へるに

よらぬ事にしあれば、

源氏の君をかぎりなきものにおぼしめしながら、 よの 人の ゆるし聞

ゆまじかりしによりて、 _{養宮坊}居がにもえすゑ奉らずなりにしを、 あかずく

ンキンニ・ザッタィナィちをしう、ただ人にてかたじけなき御ありさまかたちに、 ねびもて

おはするを、 御覧ずるままに、 **心ぐるしうおぼしめすを、** ッかう ッ う や ん

はんとて先ッ「光」といへるは縁なり。 ₩源氏君と若宮と同じくうつくしき御顔にて、 と也。「疵なき玉」とい

宮はいかなるにつけても

やとがめんと、藤つぼの御心にくるしくおぼす |岷|若宮の源に似給へる事にも、又余りとりあつかひ給ふにも、 人の見

孟藤壺の御方にて也

いだきいで

郷此説よろし。「奉らせ」とあるせもじに心つくべし ||低|| みかどのみづからいだき出給へるとは見るべからざる歟

そこをのみなん云々

しなべてかやうなるとのみおぼす、となり。 はをさなき人をまぢかく見給ふ事なき故に、 小児はみなお

源は別して御寵愛の故と、 |岷| 昔は皇子たちも外戚がたなどにつきて、各諸家にてやしなひ奉る。 や。されば、禁中に朝夕をさなくよりおはします事はなかりし也云々。 それを養君にし奉るといふ。あづかり奉る人をば御うしろみなどいふに 又外戚がたなどに然るべき人なかりし故也。

思ひわたさるるにや

湖思ひなぞらふる也。

|眠物のかよひたるをいふ。

おもての色かはるここちして

釈みづから赤面を覚え給ふさま也。

かたがたうつろふ心ちして云々 まにうつりて思はるる也云々 玉おそろしくも、 かたじけなくも、 うれしくも、 哀にも、 心のさまざ

故に此さまざまをかさね書たり云々。 |新||ひとへに思ひ定めねば、とりはづして涙もおとしつべ きを いへり。

物がたりなどして ●四ッのももじ、うつろふ心のくまぐまをいとよく写し尽されたり。

といへる、 是也。

> ことなき御はらに、 おなじ光にてさしいで給へれば、 きずなき玉と

おもほしかしづくに、 藤ツボード チラニ 宮はいかなるにつけても、 胸 △アク間 フ

アンシンニ
すからず物をおもほす。 れいの中将の君、 こなたにて御あそびなど

し給ふに、いだきいで奉らせ給ひて、 みこたちあまたあれど、 源氏君 こ

をのみなん、 かかるほどより明くれ見し。 されば思ひわたさるるに

やあらん。 いとよくこそおぼえたれ。 いとちひさきほどは、 みなか

ゥバカリ くのみあるわざにやあらん、 とていみじくうつくしと思ひ聞えさせ

給へ り。 中将の君おもての色かはる心ちして、 おそろしうも、 かた

じけ なうも、 うれ しうも、 あはれにも、 かたがたうつろふ心ちして、

なみだおちぬべし。 ☆ 物語などしてうちゑみ給へるが、 物語などしてうちゑみ給へるが、 いとゆゆしう

あながちなるや

(宋)朗云、おむ者に断りいひたる也。(宋)朗云、おぼしめす事をメッサウナル コトカナと作者のあざける様に

宮はわりなく云々

・ 藤壺の御心さこそ有べけれ。

々なるここちの

さのまされるよし也。 |玉|| 若宮をはやく見まほしくおぼしけるに、見給ひてはかへりてかなし 旧注ひがこと也。次なる歌にてもしるべし。

ほどすぐして

湖 しばし思ひしづめて也

よそへつつ云々

|花|^でよそへつつ見れど露だになぐさまずいかにかすべきとこ夏の花

いとど涙にくれて露けさのまさる故に、かひなき也」といはれたるがご壺によそへつつ見る』とはいへるは非なり。此なでしこの花をみれば、 ●本居翁云、「撫子の花を若宮によそへつつ見る也。旧注に『若宮を藤

花にさかなんと

|余||此引歌、後撰夏部にありて「よみ人しらず」としるせり。上句「我||河| ^わがやどにまきしなでしこいつしかも花にさかなんよそへても見ん やどの垣根にうゑしなでしこは」也。ここは例の書かへたりと見ゆ。

花にさかなん若宮によそへて見んと思ひしを見ては、涙の露けさまさり 郡本居翁云、「引歌の心は、撫子の花さかば思ふ女によそへて見ん、と てかひなし、 也。今引たる意は、若宮によそへて見ん、と也」。広道云、此説よろし。 との意也。世におしはれぬを歎き給ふなり 旧注共ひがこ

> おぼえ給ふぞ、 うつくしきに、 我身ながらこれににたらんは、 アンマリあながちなるや。 膜ツボ ムシャゥニ 例 宮はわりなくかたはらい いみじういたはしう なきに、

かきみ

だるやうなれば、 まかで給ひぬ。 わが御かたにふし給ひて、 むねの

なにとなく青みわたれるなかに、 やるかたなきを、 ほどすぐして大殿へとおぼす。 W 麦とこなつのはなやかにさき出たる

おまへ

0)

が前栽の、

をらせ給ひて、 命婦の君のもとに、 かき給ふことおほかるべ

*^ポ**

~はなにさかなん、と思ひ給へしも、 かひなきよに侍りければ、と有。

さりぬべきひまにや有けん、 △藤ツボニ | **御覧ぜさせて、ただちりばかりこの花**|

をだにすゑじとぞ思ふ」の歌によそへていふ也。 「塵ばかり」は、すこしばかり也。されどもなでしこの歌なれば、「ち

●花びらに歌書たる例、拾遺に挙たるを、余釈にものしつ。

いふにてしるべし。此ぬを畢ぬといへる注は、玉 初句、御みづからの也。四の句、猶うとま 猶うとまれ「ざる」也。 「猶」を俗意の にも猶と 猶 に

涙のたねといはんがごとし 「なでしこの花」は、若宮のたとへなるはもちろん也。 「露のゆかり」は かわが御袖のぬるる涙の所縁と思へども、なほうとまれざるよ、と也。 は

よろこびながら |孟||御返歌などはなしにあそばしさしたるやうにあるを、

● おおおいでは、 ● おおいでは、 ● おおいでは、 ● おいまさかに ● おいまさかに ● おいまさかに ● おいまさかに ● おいまさが りまする りまする

|細|いつものやうに御覧じもいれまじと御返りをば思ひ絶て源のましま の事なれば

うれしきにも

|岷 うれしきにさへ也

つくづくとふしたるにも

●藤壺の御返事を見たるなごりの体なり。

しどけなく打ふくだみたる

(水) ここより西の対にわたり給ひてのさまなり

あざれたるうちきすがた 人袿ばかりを着て直衣をき給はぬなり。「うちき」 は、 なほしの下に

女君ありつる花の

ゐられたる、 配有つるなでしこを引もてきて、 |細||紫上也。「有つる花」とは撫子也。面白きかきやうなり さらにめでたし 「露にぬれたる」と今一きは転して用

> びらに、 と聞ゆるを、 わが御心にも、 物いとあはれにおぼししらる

るほどにて、

*#ッポ | 神ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ。

とばかり カスカ **(ほのかにかきさしたるやうなるを、よろこびながら奉れる、**

ィ**れ**ッ モ モ ト の事なればしるしあらじかし、 とくづほれてながめふし給へる

に、 むねうちさわぎて、 いみじくうれしきにもなみだおちぬ。 つ*

づくとふしたるにも、 やるかたなきここちすれば、 れいのなぐさめ

には、

びんぐき、 シャレ あざれたるうちきすがたにて、 笛をなつかしうふきすさ

びつつ、 のぞき給へれば、* 大君ありつる花の、 な君ありつる花の、 露にぬれたるここち

あいぎやうこぼるるやうにて

|湖||愛らしきさまの余るほどある也。

か今俗もいふことにて、心おなじ。

「て」とよみ切て、 源の、 かへり給ひても紫上の方へやがても渡り給はぬを、 「おはしながらとくもわたり給はぬ」と下へつづ うら

いりぬるいその

~しほみてば入ぬるいその草なれや見らくすくなく恋らくのおほき

万葉巻七・寄藻。

|岷| 源を見ることはすくなく、恋る事の多きとの心也

|岷||紫のふといひながらはぢたるさま也

かかる事口なれ

|湖||世づれたる事を「口なれ給ふ」とたはふれ給ふ也

みるめにあくは

|孟||常住そひて有はまさなき事也、見らく恋らくのありてこそ、となり。||余||古今集・恋四・よみ人しらず。 河でいせのあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな

さうのことは中のほそをの

調のひきき調子に『しらべ給ふ』といふ也云々」。○広道云、この説本 為すなはち盤渉になるに、二・七の緒はふとき故に絶ざれども、 やすきをいふ。たとへば盤渉調などのごとき高き調子の時は、右の二・七・ の調子のときも同じ事也。さて『たへがたき』といふは、此為の緒の断 為の緒の事也。その故は、何れの調子の時も二・七・為の三絃宮にて、 秋村田光庸云、 は細緒なる故に高き調子にては絶やすき也。この故に『おし下して』平 一越調のときは此三絃一越になり、平調の時は此三絃平調になる。其余 ∵は細緒三すぢの斗・為・巾とならびたるうちの中の緒といふ意にて、☆村田光庸云、「弄花にこれを『巾の緒也』と注せられたるは誤也。こ 人本に有しを、よろしげに聞ゆればここにものしつ。猶考ふべし。 為の緒

平調におしくだして

|河|| 平調は筝柱をさげてたつる也。

は一越性調にて有けるか。箏には、一越調をしらぶるに、「かり一万字案に、「平調におしくだして」とかけるは、かねてのしらべ、 「かり一越調」

> ヨコロビイさま、 うつくしうらうたげなり。 あいぎやう

 \equiv

こぼるるやうにて、 おはしながらとくもわたり給はぬ、 なまうらめ

しかりければ、 れいならずそむき給へるなるべし。 はしのかたにつ

V あて、 こちやとの給へど、 おどろかず、 いりぬる磯のとくちず

さひて、 ^{*} くちおほひし給へるさま、 いみじうざれてうつく ア**あ**源詞 ア**な**

にく。 かかる事くちなれ給ひにけりな。 **、みるめにあくはまさなき**

かのほそをのた ^細 緒 ^堪 御琴とりよせてひかせ奉り給ふ。

さうのことは、 へがたきこそ、

ことぞよとて、

しらべ給ふ。 かきあはせばかりひきて、 さしやり給へれば、えゑじ

もはてず、 いとうつくしうひき給ふ。 ちひさき御ほどに、 さしやり

「こま一越調」といふは、その声平調にて呂也。以上洞院大将入道観喜院 狛一越調の楽也。平調の曲にはあらず。まづ平調にしらべて其調子どものかたへよせてたつる也。それを一越調といふ。又「保曽呂倶世利」は、 ををしへ給ひて後、呂の声になほして「ほそろくせり」をひかれける歟。 「さがり一越調」とて二様にあり。「かり一越調」とは、ことぢを手

かきあはせばかりひきて

はいかにぞや。「さしやり給ふ」は、紫上の前へ也。 動「かきあはせ」は、絃をを、湖月抄に「筝の琴の曲なり」と注せる
●なり、
がきあばせ」は、絃を掻ならして調子をしらべ合する事也。今俗も「て

えゑじもはてず

砂例ならずそむきて怨じ給へるが、つひにえゑんじもはてず也。

さしやりてゆし給ふ

は左の手を押ことなり。 孟」ちひさき御手にてとどきかぬる程に、 さしやりてひき給ふ也。「ゆ」

「さしやり」とは、 およびごしに手を遠くやり給ふ也

湖師 糸を左の手にておして糸に吟を出す也

かたきてうしどもを

湖習ひ得がたき調子も、 只一返にて引とり給ふ也

し事かなふと

ひのかなふことよとうれしうおぼす意なり まろづわが御心のごとく教へ聞えんとかねて思ひ給ひしに、 其御思

ほそろぐせりといふ物は

|河||長保楽右楽 破保曽呂倶世利、急賀利夜須、

|岷||楽の目録などには「ほそろぐせり」「かりやす」と別々にもあり

「名はにくけれど」とは、からめきたる名のにくき意なり

かき合せまだわかけれど

し給へる笛の音につれて琴の調子を掻合せ給ふが、 まだ幼けれど拍子たがはず 上手めきたり、 と也。

給ふべしと有つれば

|岷||今夜は何方へぞおはせんと、 かねて人々に伝られしなるべし。

紅葉賀

を、 てゆし給ふ御てつき、 まだわかけれど、 は、 しき御心ばへを、 ふえふきならしつつをしへ給ふ。 Ć、 名はにくけれど、 ただひとわたりにならひとり給ふ。 ゑどもなど御覧ずるに、 思ひし事かなふとおぼす。*
※◎○ はうしたがはず上ずめきたり。 おもしろうふきすまし給へるに、 いとうつくしければ、 **源2 出**、 いで給ふべしとありつれば、 いとさとくて、 スペテ コウシャニ ほそろぐせりといふ物 らうたしとおぼして、 かたきてうしども 大 殿 油 おほとなぶらまね かきあはせ 人々こ

 \equiv

雨ふり侍ぬべしなど

など聞えたるも、いとにくし」。

(余)清少納言に、「たてじとみ、すいがいのもとにて、『雨ふりぬべし』

「ഡ]源の御供の人々、雨のふるべきを見ていそぎたる心也。

ゑも見さして

|湖||源の出給はんを、紫上の無興し給ふさま也

外なるほどは

|湖||源のよそにおはするほどは、紫の心に恋しきか、とのたまふ也。

まづくねくねしる

と也。「くねくねしう」は、物むつかしくすねて恨をいふ形容の辞也。あたりてむつかしく恨る人の心をやぶらじとて暫くかやうに出ありく、砂 紫上は幼ければ物ねたみの事などなくて心やすし、されば先ッさし

人のうらみおはじなど思ふも

● であるでは、● できない。● であるでは、● では、● では、<

ごすが に

|岷||をさなき中にもすこし分別のまじるやうなるを「さすが」といふ。

そくてくし給へり。ゑも見さして、うつぶしておはすれば、いとらっぽ

うたくて、御ぐしのいとめでたくこぼれかかりたるをかきなでて、

外なるほどはこひしくやある、との給へば、うなづき給ふ。われも***

一日も見奉らぬは、いとくるしうこそ。されどをさなくおはするほ

チーク とは、心やすくおもひ聞えて、まづくねくねしううらむる人の、心

破った。 マネらじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。 おと

なしく見なしては、ほかへもさらにいくまじ。人のうらみおはじな

ど思ふも、世にながうありて、おもふさまに見え奉らんと思ふぞな

ど、こまごまとかたらひ聞え給へば、さすがにはづかしうて、とも

ひぬれば、いと心ぐるしうて、こよひは出ずなりぬ、との給へば、

ひて、出ずなりぬ、と聞え給へば、なぐさみておき給へり。もろと

- もに物などまゐる。 いとはかなげにすさびて、さらばね給ひねかし、 **

^{た 気}とあやふげに思ひ給へれば、かかるを見すてては、いみじき道なり。*

とも、おもぶきがたくおぼえ給ふ◎かうやうにとどめられたまふを

りをりなどもおほかるを、おのづからもりきく人、おほい殿に聞え

100 **人とも聞えず、さやうにまつはしたはぶれなどすらんは、** あてや

みなたちて

紫上の方に也。 繋上の女房共なるべし。諸注に「御供の人々也」といはれたるはい

いとはかなげにすさびて

湖御膳しかともまゐらぬ也。

むみのやうに参るさま也。
なほうたがはしく無興におぼして、物などもしかとたうべず、なぐ

あやふげに

那猶たばかり置て出給はんかとあぶなく思ひ給ふ、と也

かかるを見すてては云々

さらぬ道なりとも」といへり。さもあらんか。もおもふきがたくおぼえ給ふ、と也。湖月に「たとひ死する道などのえもからんかたらうたき紫上のさまを見すてては、たとひいかなる大事有とて

おのづからもりきく人

かやうの事をもれ聞たる者ありて、葵上の方へ告たる也。

かふさま也。紫とはしらぬ也。 | 岷| これより此人をいかやうなる人ならんと、大殿がたに色々いひあつたれならん

いままでその人とも

などはすまじきを、さやうにするは、あまり心にくき人にはあらじ、と也。|湖|上臈ならば誰としれもし、 又さやうに源氏をなれまつはしたはふれ

紅葉賀

三四

内わたりなどにて

るらん、さて人のとがめてはと世を憚りかくし給ふなるべし、と也。 |岷||内裏あたりの宮づかへ人が、一旦源の寵し給ふにほこりてさやうな

物めかし給ひて、「人やとがめん」とおぼしてさやうにいひなし給ふらん、 いはけなきやうに聞ゆるは、内わたりなどにてはかなく見給ひけん人をかたおひなる人をさしもかしづき給ふべきならぬに、世づける心もなう |拾||此句は上の「内わたりなどにて」 とおしはかる心也云々 といふ上へ返して 見るべし。 まだ

いとほしくおとどの云々

岷此詞のつづき、 御門の御心なるべ 「おとどの思ひなげかるなる事も」「いとほしく」と

所 のげなかりし時分といふ意也。さる時より後見してねんごろにかくおほ したてられたる心を思へば、げに歎かるるもことわりぞ、 く」より帝の御詞也。「物げなかりしほど」とは、 Lをおとどのいとほしく思ひ給ふ意にもあらんか。さては「いとほし 文脈いたくまぎらはし。「心を」のをもじも穏ならぬやう也 「いとほしく」といふまで、みかどの御心なるべき歟。 源氏君の幼くて、 との意也。此 は ŧ

さばかりの事たどらぬほどには

別なくてかく情なくはもてなすらん、 ● それほどの事をたどり知ぬ源氏君の年のほどにはあらぬを、 と教訓し給ふ也。 など分

かしこまりたるさまにて

心ゆかぬなめりと ₹ 源氏君はただ恐入たるさましたるのみにて、御答もし給はねば也

いとほしくおぼしめす 「存分な」といふことなり

[岷] 葵上の父大臣の心中をおぼしめすなるべし。

歌案に此説よろし。源氏君をいとほしと思し召やうにいへる注は、 わ

さるはすきずきしう云々

秋此段、 事のさまただに源氏君へ教訓の御詞とも見えざれば、 末に「のたまはす」とあれば、 帝の御詞なる事は論なし。然 これはた

> かに心にくき人にはあらじ。 内裏 ヘン うちわたりなどにて、 はかなく見給ひ

け h 物めかし給ひて、 人やとがめん、 とかくし給ふななり。

心なげに V はけて聞ゆるは、 など、 さぶらふ人々も聞えあへり©う

也ちにも、 かかる人ありときこしめして、 **いとほしく、** おとどの思ひ

なげかるなることも、 tyke けにものげなかりしほどを、 けにものげなかりしほどを、 シンセッニ

、も物したる心を、 ソレホドの事たどらぬほどにはあらじを、**

かなさけなくはもてなすらん、 との給はすれど、かしこまりたるさ

まにて、 御いらへも聞え給はねば、 心ゆかぬなめり、 といとほしく

おぼしめす。 さるはすきずきしう打みだれて、 この見ゆる女房にま

しれ またこなたかなたの人々など、 なべてならずなども見え聞えざなべてならずなども見え聞えざ

は、源氏君のつねの御さま也。 だかく人にもの給ふと見るべきにや。 扨「すきずきしう打みだれて云々」

この見ゆる云々

又こなたかなたの人々など ないこのみかどの御身近く仕へ奉りて見えわたる女房どもにもあれ、 恆

てならずなども

取又ここかしこの女などにもあれ、

といふ意なるべし

彼此密通したるを評すると全く同意也。かやうに見ざれば、ざめるをと給ふ意にや。さらば今俗の語にヒトトホリデハナイなどといひて、男女 いふ辞にかなひがたし。 案に、なべてならずとえり出て心をかよはし

いかなるもののくまに

られ給ふらん、不思議也、との給はす意なるべし。れにかしのびありきてかやうの人をむかへきて、 ₩ 源氏君は誰にも通じ給ふさまには見え給はぬを、 かく大臣などにも恨みを、いかなる物のかく

御門の御としねびさせ給ひぬれどかうやうのかたは云々 ▼ ここより草子地の評也。帝の御よはひふけさせ給へれど、

猶好色の

うねべ女くら人 |新||采女は、古へより諸国の郡司以上の人の女妹姪などの中にかたち勝| やして籠し給へれば、さるよしめきたる官女たち多き時節也、といふなり。方はえすぐさせ給はずして、、采女・女蔵人などをも容色あるをばもては

れたるを奉るを、 釆女司・釆女町ありておかる。その中に陪膳の被官な

どにあづかるは、品よろしきもあり。式には四十七人と見えたり。 となるは、又ことによろしき品なり。 女蔵人は、 いよいよ御膳の事を専らつとむ。 中臈・下臈の品有て、

水司・膳司

|弄||今も女蔵人とて内裏に祇候す。賀茂などの女也

|箋||典侍・掌侍などは勿論といふなり

はかなき事をもいひふれ給ふには

玉補 帝の也。 「目なるるにやあらん」は、 官女たちさる事に目なるる故にや、 それに合せては御子の源氏君は、 と也。

これ上文の意を草子地に釈する也。心をつくすべし。「もてはなるる事も有がたき」とは、源氏君の才貌いみじき故に、はかなき戯言をいひかけかは源氏君なり。これより上は、帝の色を好み給ふ故によき女の多きよしをいひ、これより下は、源氏君のひたふるに色好み給はぬよしをいふ。 給ひけるにいづれの女ももてはなれてうけひかぬことは有がたきに、それをも源氏君は御目なれてにや、 不思議に誰にもいひより給はぬ、

めるを、 **()*** かなる物のくまにかくれありきて、 かく人にもうらみら

るらん、 とのたまはす。 みかどの御としねびさせ給ひぬれど、 かう

好らのかたはえすぐさせ給はず、 *◆ イめニョンミグ うねべ女蔵人などをも、 かたち心

あるをば、 ことにもてはやしおぼしめしたれば、 よしある宮づかへ

人おほかるころなり。 △源乙 チョットシタ へ。 はかなきことをも った いひるれ給るには、 ゥケケッは

なるる事も有がたきに、 ^目 別めなるるにやあらん、 ィカサマ フシギニ 好げにぞあやしうす 色しい

三五

こころみにたはぶれごとを

■あり、と也。

のり、と也。

のり、と也。

ので実にはみだれ給はぬを、あまり直実にてさうざうしと思ひいふ女もかたより戯言をいひかかりなどする時もあれど、情なからぬほどにいらかたより戯言をいひかかりなどする時もあれど、情なからぬほどにいらいかが思ひ給ふと試みがてら、女房のののあまりにすき給はざる故に、いかが思ひ給ふと試みがてら、女房ののではない。

年いたうおいたるないしのすけ

●を大変で「源内侍のすけ」といふよしは、葵巻に見えたり。 此巻は藤壺宮と紫上との事のみにてめづらしきこともなければ、思ひの 外なるをかしさをいひてしばらく見る人の眠をさましたるなるべし。此 外なるをかしさをいひてしばらく見る人の眠をさましたる也。さるは、 かなるをかしさをいひてしばらく見る人の眠をさましたる也。さるは、 かなるをかしさをいひてしばらく見る人の眠をさましたる也。さるは、 かなるをかしさをいひてしばらく見る人の眼をさましたる也。さるは、

そなたには

|岷 好色のかたには也。

さだすぐるまで

だ過る」といふは、たいないふ也。五十七八といへば、上に「年いたう老たる」といふは実也。ここにて「さ五十七八といへば、上に「年いたう老たる」といふは実也。ここにて「さ瀬」人の定三十也。それ過るを「さだ過る」と云。此内侍は末に

ほどをいふにはあるべし。「みだるらん」は、好色にみだるる意也。()。「さだ」を三十と決められたるはいかがなれど、大かたさばかりの

にげなくも思はざりけり

₩内侍、心に源を似合ぬ中ともおもはぬ也。

ものなどの給ひてけれど

●あひ給ひし事なるべし。岷江入楚に「あひ見そめ給へるにてはあるいかが。下の文に「今さらなる身のはぢにもなん」といるを思ふべし。

つれなくもてなし給へるを

りあれど、なさけなからぬ程にうちいらへて、まことにはみだれ給

直と モノサビシィ と思ひ聞ゆる人もあり』としいたはぬを、まめやかにさうざうし、と思ひ聞ゆる人もあり』 *

き 典 侍 ヒトカッラ キマヘ キマヘ 上ヒン

におぼえたかくはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、

其 方 重 △ガ 定 過 アノヤウニモ そなたにはおもからぬあるを、かうさだすぐるまで、などさしもみ

だるらん、といふかしくおぼえ給ひければ、たはぶれごといひふれ

てこころみ給ふに、〝にげなくも思はざりけり。あさましとおぼしなってころみ給ふに、〝にげなくも思はざりけり。あさましとおぼしな

がら、さすがにかかるもをかしうて、物などの給ひてけれど、人の

場 すっぱん もいきい もりきかんもふるめかしきほどなれば、つれなくもてなし給へるを、

うへの御けづりぐしに

|孟||御門の御ぐしけづりに源内侍の参る也。

っへは御うちぎの人めして

御衣めしかふる所へ出させ給ふなり。
御衣めしかふる所へ出させ給ふなり。
「御うちぎの人」は、「御さうぞくの衣文に参る人なり」と岷江入楚

また人もなくて云々

かるてにをは也。

● 源氏君に心ある故に、常よりもきよげにさうぞきたるなるべし。つねよりもきよげに

まふなり。 脚 源心に、源内侍がさても年よりがたくなまめくかなと、笑止に見た

いかが思ふらんと云々

釈一たびあひ給ひて後絶給へるを、

内侍はいかが思ふらんと、さすが

見すぐしがたくて也

|箋||裳は、きぬよりもすそへさがりてひかれたるべし。ものすそを

かはほりの云々

|河||蝙蝠を見て扇を作り始めける也。仍て夏扇の異名也。

はぢらひたるさましたるが、いとをかしき也。る也。「さしかくして」は、扇をかざして顔をかくしたる也。若き女のの、えならずゑがきたる」とは、えもいはれずうつくしう画をかきた

たるまみ、

|岷||昔は女は常に扇をさしかくす也。さし扇といふ。冬は檜扇也。

いたう見のべたれど

₩ 目皮を見のべたれど、といふ意也。愛を含みたる目つきして、遠く見て目ぶちをのべたるさま也。

まかははいたくくろみおちいりて

皮は、 年よればくろみ落入也 今案、眼皮も有「其謂」歟。 老者なればとてまかぶらのおちいるはなき歟

取 眶も眼の皮の事なれば、たがへるにはあらず。 見延たれど猶黒みておち入て見ゆる也。

女はいとつらしと思へり。 きへの御けづりぐしにさぶらひけるを、 なてにければ、うへはみうちぎの人めして、出させ給ひぬるほどに、 また人もなくて、このないしつねよりもきよげに、やうだいかしらまた人もなくて、さうぞく有さま、いとはなやかに、このましげにのきなまめきて、さうぞく有さま、いとはなやかに、このましげにのるを、さもふりがたうも、と心づきなく見給ふ物から、いかがるゆるを、さもふりがたうも、と心づきなく見給ふ物から、いかがるゆるを、さもふりがたうも、と心づきなく見給ふ物から、いかが

へれば、かはほりのえならずゑがきたるを、さしかくしてみかへ

紅葉賀

いみじうはづれそそけたり

る髪の、 ● 「はづれ」は、髪のはづれ也。かかりなどいふに同じ意にて、垂た いふにて知るべし。 まゆのあたりへかかりたるはづれ際をいへる也。「そそけ」と 諸抄用なき説ども多し。みなひがこと也

につかはしからぬ扇のさまかな

|岷| 或抄云、扇のさまのわかわかしきをいふ。

歌此説よろし。「赤き紙のうつるばかり色深きに云々」の画やう、 には似合ぬ、と也。 諸抄の説ひがことおほし。 老女

わがも給へるに

₹ 源氏君わがもち給へる扇ととりかへて見給ふ也。扇をかふる事、 八外にも見えたり 花

うつるばかり云々ぬりかくしたり

釈物にうつろふほど色ふかき也。

|箋||泥にぬりかくしたるをいふにや

てはいとさだすぎたれど云々もりの下草おいぬれば

取内侍の手はふるびたれど、よしありて書たるなり

余 古今・雑・よみ人しらず (大あらきものりの下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

ことしもこそあれ

かくべき事こそ有べきに、あまり色めきたる心ばへや、とをかしく

もりこそ夏の

|拾||此歌、何にある歌にか見及ばず。 [〜]ひまもなくしげりにけりな大あらきのもりこそ夏のかげはしるけれ 信明集に、 ҈郭公きなくをきけば大

どる人多きやうに見ゆるは、と戯れ給ふ也。 はいへど、大あらきのもりこそ夏のやどりといへらんがごとく、砂拾遺の説たしか也。をりから夏なれば、とり合せて、しかお荒木のもりこそ夏のやどりなるらし。此歌にてかけるなるべし。 しか老たりと 行てや

釈源氏君老人に物の給ふも似合しからぬを、 く思ひ給ふを、 内侍は色好みの心にさも思はぬ也。 もし人や見つけんとくる

> いみじうはづれそそけたり。 *◆ 似着につかはしからぬ扇のさまかな、**** と見

給ひて、 わがも給へるに、 さしかへて見給へば、 あかきかみのうつ

るばかり色ふかきに、 木だかきもりのかたをぬりかくしたり。 今りと片た

つかたに、 書フルメキではいとさだすぎたれど、 よしなからず、 べもりの下草

おいぬればなど、 かきすさびたるを、 ことしもこそあれ、 アンマリアンマリ

心ばへや、 とゑまれながら、 でもりこそ夏の、 とみゆめるとて、 な

にくれとの給ふもにげなく、 人や見つけんとくるしきを、 女はさも

おもひたらず

ŧ_° といふさまこよなういろめきたり。

花ごわが門の一むらすすきかりかはん君がたなれの駒もこぬかな。 こざりければよめる、と有。 男の

余案るに、 此歌古今集としるされしは誤也。後撰・恋二、「小町があね」

ささわけば人やとがめんいつとなく駒なづくめるもりのこがく***

草」などいふによりて、森の下の草葉の意に用ゐたるなるべし。下旬、葉」は、若草ならで時の過たる下葉といふ也。「した葉」は、「もりの下たる馬といふ意、「かりかはん」は、苅て馬に飼ん也。「さかり過たる下 ● げに此歌をよみかへたるなるべし。「たなれの駒」は、乗人の手馴し 内侍みづからのたとへなる事はあらは也。

|細|源に御出あれのよし也。

ささわけば云々

|花||蜻蛉日記~ささわけばあれこそまさめ草がれの駒つなぐめるもりの下

がめんがわづらはしさにゆかず、 |新||常に人多くなづくる所なれば、 篠など分入らば先ッしめし、

のがれ給ふ也。 と内侍のすき心をたはぶれながらいひ

人のと

れ。 そ思ひ侍らね。 *源詞 えん。 わづらはしさに、とてたち給ふをひかへて、まだかかる物をこ*詞 今さらなる身のはぢになん、 とてなくさまいといみ

思ひながらぞや、

とてひきはなちて出給ふを、

シせ

●初句、森には必篠など有べければいへり。「いつとなく」は、 いつといふ事なしに、いつにても、 の意也。「木がくれ」 は、 しのびてゆくによ

わづらはしさに

せたるべし。

水人のとがめんがわづらはしさにえゆかぬ、

かかる物をこそ

● 花鳥に引歌あれど、そは拾遺に弁へたるがごとし。ここは引歌に及ばぬ所なれば、皆はぶきつ。余滴に引るも、 なほかなひがた

いまさらなる身のはぢになん

|孟||内侍の、此年になれどもかやうの恥をばまだかかぬ、 と也。

今聞えん思ひながらぞや 小一度あひて忘られたるは、女のいみじきはぢとするならひなりし事、此外にも多く見えたり。 ただに戯言のみの故にはあらざること知るべし。

郡此今は俗にオッツケといふに似て、 後刻といふに近し。 只今は人めもあれば後に又いはんとの意也。 「思ひながらぞや」は、心には思ひながら

紅葉賀 三九

|拾| これは新勅撰・雑四に「謙徳公につかはしける、よみ人しらず」とて、 がらの橋柱思ひながらに中やたえなん、よみ人しらず。 ※思ふことむかしながらの、 (津の国のながらの橋のはしばしらふりぬる身こそかなしかりけれ とある歌也。拾遺・恋四でかぎりなく思ひな これらにてかけ

とて猶つきまとふさま也。 釈 なして橋柱といへる、 「思ひながらぞや」と源氏君のの給へるにつきて、それを長柄に取 いとをかし。さて意は、 思ひながらに中や絶なん

うへはみうちきはてて

● みかど御衣をめしかへて、出給ふとて御障子の内よりのぞきて見給

さざりける」は、内侍の、源氏君をばさてはすぎしめざりけるは、 万内侍をさへすぐさずたはふるるは、とてわらはせ給ふ也。 |玉補||内侍のごとき官女達の、源氏君をば、と也云々。「さはいへどすぐ と也。

「すぐさざりけるは」の注、万水一露よろし。

|岷|源の好色ならぬと人のもてなやみしこと、此前の詞にあり

にくからぬ人ゆゑは

余後撰・恋五、中将内侍。 くからぬ人のきせけるぬれきぬはおもひにあへず今かわきなん 二の句「きせけん」。

や からず思ふ人の故には、なき名をだにおはまほしがるたぐひもある故に 内侍はいたくもあらがひ申さず、と評じてかける也。 「ぬれぎぬ」は、なき名おふ事にいひならへる一種の俗語也。にく

あつかふめるを

取もてあつかひて評判する也.

らぬくまなきこころにて

₩好色のかたに至らぬ所もなく明らかなる心にて、

まだ思ひよらざりけるよ 那さる老人を物せん事はまだ思ひつかざりし事よと思ふに也。

つきせぬこのみ心

取年ふりたれど猶尽せぬ色好みの心をも、 なれる也。「尽せぬ」の語、 いとをか いかなる物かと見まほしく

かたらひつきにけり

ヒテオッツィテめておよびて、 **~はしばしらとうらみかかるを、** 、 うへはみうちぎは

てて、 みさうじのうちより、降子イのうちょう のぞかせ給ひけり。 につかはしからぬ

アヒダかな、 といとをかしうおぼされて、 ☆すき心なし、

てなやむめるを、 サウハイウモノノ ノ ガ サ さはいへどすぐさざりけるは、 とてわらはせ給へ

ば、 内侍はなままばゆけれど、《にくからぬ人ゆゑは、 ぬれぎぬを

デだ、モに、 きまほしがるたぐひもあなればにや、 いたうもあらがひ聞え

させず。 人々も思ひのほかなる事かな、 とあつかふめるを、 頭中将

ききつけて、 * いたらぬくまなき心にて、 * ッカッカッカンよう

と思ふに、つきせぬこのみ心も、 みまほしうなりにければ、 ^{〈内侍三}語 がたら

ひつきにけり。 此君も人よりはいとことなるを、 かのつれなき人の

離省筆の文法。 ₩頭中将もよのつねの人よりは格別にうつくしき人なれば、 源氏君の

かぎり有けるをとや

かはりとしてつれなきなぐさめに見んと思ひつれど也。

なるべし。 引いでて弁ふるがごとし。 ぎり有ける世」とはいへる也。さて、とやの下にいはましなどの意をふ にやあらん、つらき人をしひてなげくは」とやうにとられたる故に、「か 「恋しさにもしかぎりのある世ならば、 句によりてかかれたるにて、意は、「頭中将をつれなき源氏君の御かは るをもじは、世字を草書に含と書たるを、をに写し誤れるよりまぎれして聞えたるはなし。かれつらつら考るに、、かぎり有けるをとや」とあ づけよみて、 くめのこしたる也。〔御なぐさめに、と思ひつれど見まほしきは」とつ りありける世とやいはまし、 りにと思ひてかたらひつれど、 りだにある世なりせばつらきをしひてなげかざらまし、とある、 那此語いとまぎらはしきを、諸抄にとかれたる意、 ん、いとをこなる物ごのみや」と、草子地より評じたる也。 まじ」といふ意なるを、打かへして、「恋しさにかぎりのありける世 さて河海に引歌二首を挙られたる後の歌に、『恋しさのかぎ %るがごとし。一本をなく、一本となきは、写しおとよくよく味はふべし。諸抄のひがことなるよしは、 、さてぞ源氏君のつらきをしひてなげくなら 猶源氏君の見まほしきは、恋しさのかぎ 人のつれなきをもしひてはなげ いづれも義の貫き 写しおとせるな 引歌の意は、 余釈に 此歌の

> 御なぐさめに、 と思ひつれど見まほしきは、 △ヲホ源ノ べかぎり有けるをとや。

うたてのこのみや。 いたうしのぶれば、 源氏の君はえしり給はず。

△源ヲ まづうらみ聞ゆるを、 よはひのほどいとほしけ

れば、 なぐさめんとおぼせど、 かなはぬものうさに、 いとひさしう

なりにけるを、 **ゆふだちして、** なごりすずしきよひのまぎれに、う *◆温

ん め_明 い でんのわたりを、 たたずみありき給へば、 このないし、

かなはぬものうさに

「ものうき」は、俗言にいやなるといふ意にて、ここは、 なぐさめんとおぼせど其心にもかなはず、 いやなるなり。

べし。

夕だちしてなごりすず 例のめでたし。下の東屋を引出んため也

うんめいでん

|岷||温明殿は、神鏡はじめて別殿に移りおはします時の御殿とみゆ。|||花|| これは中の重の東の方にある殿にて、内侍所のまします所なり。 内侍所とも賢所とも申奉る。 内侍所とは、神鏡のおはします御殿に必内侍の

この内侍

||低||源内侍も温明殿にさふらふ也|

四三

紅葉賀

|岷| 御前の御遊などにおぼろけの女房の所作は有べからず、比巴の上手

もののうらめしう云々

うりつくりになりやしなまし |岷||源の御事などを物うらめしく思ふなるべし。又物思ふ時ひく物の音 その声あるべければあはれに聞ゆとい

よや、 せん、なりやしなまし、 うりつくり、はれ。二段くうりつくり、我をほしといふ、いかにせん、な |余||河海に引給へる催馬楽、二段いささかたがへり。 いまここにしるす 山しろの、こまのわたりの、瓜つくり、なよや、らいしなや、さいしなや、 らいしなや、さいしなや、いかにせん、いかにせん。

三良ぐいかに うりたつまでにや、 らいしなや、 うりたつまで

きなくおぼせるなるべし。 |玉| 「我をほしといふ、いかにせん、なりやしなまし」といふを、 心づ

この説いかが。ただ色めきたるを心づきなくおぼせる也。

しうに有けんむかしの人も

州猶叶」物語意「歟、源内侍声はいとをかしくて山城歌をうたひたるを、 月、借問誰家婦、歌泣何凄切、一問有、婦顔如、雪、独倚、帆橋、立、娉婷 有,歌者, 発調堪,愁絶, 歌罷継以,泣、泣声通復咽、尋,声見,其人,事自氏文集・第+。夜間,歌者,宿,鄂州、夜泊,鸚鵡州、江秋月澄徹、蹀あむしの人も」とあり。両説いづれも証本也。各可,随,所好,。鄂 鄂州にて楽天の歌を聞しによそへたる歟、如何。 定価卿本には一がく 説いづれも証本也。各可」随」所好」。 鄂州」しう」と有。親行本には≦文君などいひけ 一問一霑」襟、低」眉終不」説。案之、鄂娉婷十七八、夜涙似』真珠,双々堕』明 「テョレー, 江秋月澄徹、隣舩」

|湖師||鸚鵡州は鄂州の内に有。

鄂州ぞよろしかるべき 挑」之」とあるには文君も似つきたれど、それは「瓜つくりに」とうた へるかたの事にて、「すこし心づきなき」と評じ終れる詞あれば、 けん。「物のうらめしうおぼえけるをりから、 へる句につきづきしければ、今は鄂州にしたがへり。史記に「以」琴心 いとあはれに聞ゆ」といいかにしてかまがひたり なほ

> をいとをかしうひきゐたり。 △帝/) ◇御前などにても、 ィもナシ 男子 をとこがたの御あそ

びにまじりなどして、 ^殊 勝る人なき上ずなれば、 物のうらめ

しうおぼえけるをりから、 いとあはれに聞ゆ。 ぐうりつくりになり

やしなまし、 とこゑはいとをかしうてうたふぞ、すこし心づきなき。

がくしうにありけん昔の人も、*◆**** かくやをかしかりけん、とみみとま

りて聞給ふ。

。ひきやみて、

いといたう思ひみだれたるけはひなり。

源氏東屋のびやかにうたひて、きみあづまやをしのびやかにうたひて、 よりゐ給へるに、 、たがしひ

らいてきませ、 ム声ヲ と打そへたるも、 例にたがひたるここちぞする。

たちぬるる人しもあらじあづまやにうたてもかかるあまぞそきか*^{*}/_{*}

な。 と打なげくをわれひとりしも聞おふまじけれど、 うとましや。

君の事なるべし。 いたう物を思ひみだれたるさまに聞ゆる也。 源氏

あづまやを

おしひらいてきませ、 河、あづまやの、 らかせ。 二段でかすがひも、 まやのあまりの、雨ぞそき、 われや人づま催馬楽・東屋・律二段 とざしもあらばこそ、 われ立ぬれぬ、 、その戸、 われささめ そのとひ

細「その戸開かせ」の意なり。

よりおもしろし |岷||前の詞に「夕だちしてなごりすずしき」とあり。 雨ぞそきの詞にた

おしひらいてきませと

がひたるここちぞするや、といへり。 ₩ 東屋二段「おしひらいてきませ」といふ所より、 たる也。されど女のいふべき詞つきにもあらず、うたてければ、例にた いとめでたし

内侍のうたひそへ

へして、

人にしたがへば、

すこしはやりかなるたはぶれごとなどい

雨ぞそきはうたて音するよ、と也。源の「この戸ひらかせ」との給ふとも、 まことにあらじ、と也。「うたて」は、ここはなまじひになどいふ心なり。 |湖| 「我立ぬれぬ」といふをうけて、われを思ひて立ぬるる人もあらじを、

なに事をかくまではとおぼゆ。

| 人づまはあなわづらはしあづまやのまやのあまりもなれじとぞ思**|

ঠ とてうちすぎなまほしけれど、 あまりはしたなくや、 と思ひか

ひかはして、 これもめづらしき心ちし給ふ。 頭中将は、 この君のい

「うたてもがかる」といへり。源氏君のとひ給ふによせたる事はいふもさらなり。 東屋

ふ物の事は、 雨たりのそそきてちりかかるをいふ故に、 東屋巻に注すべし。

小雨ぞそきは、

人づまは云々 の内侍のかくいふを我ひとり聞て、我身のみには引おふまじく、なほ他の男も同じさまならんとは思ひ給へど、うとましくて、何事をたねにかい。 (水)人妻は人の妻といふことにて、即東屋の歌に「われや人妻」とあるをとりそへていへり。 まではなげくらん、とおぼえ給ふ也。「聞おふ」とは、 いさかひ出来てわづらはしからん、の意也。「あづまやのまやのあまりも」も、東屋歌の詞也。「われや人妻」とあるをとりそへていへり。この下に見えたる修理大夫など、其外にもかよふと 内侍のいふことを聞て身に引負ふ意也。 俗に 「引かくる」 といふがごと

あまりはしたなくやと さてあまりにも相馴じと思ふといひかけたるなり

聞給ひて、かくよみ給ふ意也。「わづらはし」は、

打過てゆかんとはおぼしけれど、 内侍の老て色めきたる人がらにより、 がらにより、すこし手づよきさまの戯れなどもいひかはして、かやうなるもまたさるかたに珍らしき心ちっさりとて余りに不都合ならんと思ひかへして入給ふ也。「人にしたがへば」とは、先方の人がらによれば、 んと

頭中将は云々

₩頭中将は、源氏君の常に実体めきて、 の多きを見あらはさんとてうかがふに、 今かく内侍の局に入給ひたるを見て大に悦び給ふ也 わが好色事するをもどきいさめ給ふがくちをしきを、 さりげなくもてなして、 源氏君のかよひ給ふかた

四三

紅葉賀

かかるをりにすこしおどして

● かやうの時におどして源の御心をまどはして、さてこり給ふやとい ひて常にもどき給ふむくいをせんとて、俄にも入らずうかがひ給ふ也。

|新||源のねいりたる時入て、 つよく驚かしめんとて也。

風ひややかに打吹て

1 夕立のなごりの更ゆく空、いとめでたし、

と思ひて、

しまどろむにやと

君はとけてしも ●花鳥本、君はそらねふりしてとけてもねられぬころなれば」と有。諸 ₩ 源氏のまどろみ給ふにやと見ゆるけしき故に、頭中将やをら入給ふ也。

此内侍、源の心にあかねば、うちとけてもね給はぬ也。こころとあるは、少しいかが。「ころ」を写し誤れるにや。

岷此内侍、

に、

猶わすれがたくすなるすりのかみ

|河||修理大夫也。大夫は此職のかみ也。

|新||修理大夫の此内侍を相しれる事を、 かたへより書入れたるもおもし

出たる巧、 前後に縁なくて不意に書入れたるがおもしろき也。この内侍、かか きものなれば、 いとめでたし。 かよふ人あまた有べくおもはせたる中の一人をとり

おとなおとなしき人に

|岷||修理大夫、年おとなしき人なるべし。

『にげなきふるまひ」とは、老女とね給ひたる事也

△源2 カヨヒ たうまめだちすぐして、 | 常にもどき給ふがねたきを、 いかで見あらはさん サリゲナク

とのみ思ひわたるに、 今宵ノコト いとうれし。 かかる

をりに、 すこしおどし聞えて、 をゆめ聞ゆ。 風ひややかにうち吹て、 御心まどはしてこりぬや、 といはん

ややふけゆくほど

に、 すこしまどろむにや、

君はとけてしもねられ給はぬ心なれば、* と見ゆるけしきなれば、

ふと聞つけて、

この中

将とは思ひよらず、 後の日本がたくすなる、 一本の作列 す修 り理 0 大 大 夫 た こ そ あ ら

めとおぼすに、 おとなおとなしき人に、 かくにげなきふるまひをし

みつけられん事はづかしければ、 アアメンダウ + **U** ヵ へ ラ ウ よ。

くものふるまひは

҈わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるし

|余||日本紀「くものおこなひ」

すかし給ふ、とのたまふ也。 「修理のこん」とは、 女のかねて知ぬらんものをさもいはざりしを

● 「かねてしるしも」といふによりて、「しるかりつらん物を」 きたる也 とはか

こほごほと

土補 こもじ清てよむべきか

歌なほ濁りて読べし。

湖 屏風をたたみよする音也

内侍はねびたれど云々

ぢわななきたるかたち、「つと」は俗言にチヤットといふ意也。しさにふるひふるひ、中将を取とめたり、と也。「ふるうふるう」はお 前もかやうの事どもありて心うごかす事ををりをり有ければ、それに馴 小内侍は年たけたれど、いたく風流めきなよよかに弱き人なるが、已 て、甚しくあわてたる中にも、源氏君をいかにするにかあらんと、 ,「つと」は俗言にチャットといふ意也。 わび

いと心あわたたしくふるはるれど、さすがにさきざきも有しになれて、「新」此所隔句ども多し。直にいはば、年たけても本より和らびたる人にて、 此体おほし。 さるを、かく詞を前後の様に置にて、文のよろしき也。いせ物語などに ただぎえにも消ず、中将を引とどめて君に近づかすまじうする、と也。

> 類 株 者のふるまひはしるかりつらんものを。 心うくすかし給ひける

よとて、 ta はなりをとりて、 屛風のうしろに入給ひぬ。 中将を

かしきをねんじて、 △
源
こ

・
ひ
き
た
て
給
へ
る
屏
風
の
も
と
に
よ
り
て
、 ごほごほ

とたたみよせて、おどろおどろしうさわがすに、 内侍はねびたれど、

、たくよしばみなよびたる人の、 さきざきもかやうにて、 心うごか

すをりをり有ければ、 △ソレニ ナレテ 大 大 大 大 大 大 いみじく心あわたたしきにも、 こ

の君をいかにしなし聞えぬるにか、 とわびしさに、 よるうふるうつ 戦 慄

とひかへたり。 たれとしられでいでなばやとおぼせど、 ラチモナイ

すがたにて、 いとをこなるべし、とおぼしやすらふ。 かうぶりなどうちゆがめてはしらんうしろで、 おもふ

中将いかで我としられ聞

に

紅葉賀

云々。又号,叩頭之処,、曰,我君,」。

(宋) 日本紀・巻五崇神「乃飛込甲而逃之。 知デステ 得免免 叩頭兒、 我が君き

このましうわかやぎて

|湖||内侍のさま好色にふけりわかやぎて、 と也。 身をもてなしたるうはべこそ

思ひまどひしさま、 |湖||内侍のかたちづくろひもなく打とけて居る時に、 若き衆の中にてはみぐるしかり 中将におどされて

なかなかしるく見つけ給ひて

将也、 あらぬさまにもてなしておそろしきけしきをみするからに、 といふ事を著く見しり給ふ也。 却で中

●中将の源としりてかくわざとおどす也、と思して也。

人なめりと見給ふに

即中将也と見給ふ故にいとをかしくなりて、 つみ給へる也。 太刀ぬきたる腕をとら

ねたきものから

₹我と見しられたるが残念なるものの、 をかしくなりて吹出して笑ひ

物狂ひにや、といはんがごとし。 |新]「うつし心」は現心にて、こ

ここは、常の心にてはかくはし給はじ、

まことにはうつし心かとよ

たはぶれにくしや 歌戯れたるが実の事になりて腹たつるやうの事にいへり。 かく太刀ぬ

いでこのなほしきん |湖||前に「直衣ばかりをとりて屛風のうしろに入給ひぬ」と有。 きたるは本心にや、 さてさて戯れがたきことよ、 との意也。 しどけ

なきさまなれば、まづ直衣きんとのたまふ也。

即中将直衣をとらへてさらにはなち給はぬ也

えび、 と思ひて物もいはず、 ただいみじういかれるけしきに、 もて

なし たちをひきぬけば、 女あが君あが君、 大事 とむかひて手をする

に、 オホカタ モチットノコトニ キチットノコトニ キチットノコトニ キャカタ なべし。 どのましうわかやぎて、 ックロウもてなしたる

表 方はべこそ、 さても有けれ、 五十七八の人の、 うちとけて物思ひさ

わげるけはひ、 えならぬはたちのわかうどたちの御中にて、 物おぢ

したる、 いとつきなし。 知此 マギラカシかうあらぬさまにもてひがめて、 おそろし

けなるけしきをみすれど、なかなかしるく見つけ給ひて、

*◆源
・*☆源 われとし

りて、 ァ ザ ト ことさらにするなりけり、 バカラシウとをこになりぬ。 人なめりと

見給ふに、 いとをかしければ、 たちぬきたるかひなをとらへて、 いと

とかい たうつみ給へれば、 ザンネンナ コラヘデ ねたき物からえたへでわらひぬ。*+ロタ まことに*源詞 イにナシ

|岷||源に直衣をきせ奉らねば、 頭中将をもぬがせ給ふ也

まふ」はあらそふ意なり。

相撲を「す

まひ」と云も、

いどみあ

ひこしろふ らそふ意の体言也。

●「ひご」はひきの転、「しろふ」は辞にて、互にする意也。 「つきしろふ」

ほころびは しろふに同じ

必体言と聞えたり。 るを「ほころび」とて一ッの名にぞいひけん。「ほころびは」とある詞、 取直衣の袖のほころびて絶たる也。案に、袖つけたる下の縫のこした 今の小袖にヤツクチなどいふ所めきて聞ゆ。 猶余釈

つつむめる云々

名あらはれん、といふ也。 「つつむめる」は、源のうへに実法をたて給ふやうなれども、 その

源と頭との「中の衣」といひなしたる也。 釈 給ふ名のもりいでん、と也。 「引かはし」は、互に引て也。かく中の衣のほころびては、つつみ 中の衣、ここにてはたがひに引かはす故に、

うへにとりきば

~紅のこぞめの衣したにきんうへにとりきばしるからんかも

|余||六帖・巻六衣部。万葉・巻七には結句「ことなさんかも」と有|

|花||ほころびたる直衣をうへにきば、 うき名はかくれあるまじき心也。

かくれなき云々

|新||本より隠れなからんを知つつかく来しは、浅き心なれば、 もそこの名ぞしるからん、てふ意也。 我名より

「夏衣きたる」とは、頭中将の来れるをいふなるべし。

「夏衣」は、着といひかけたる枕詞にして、 且「うす Ė の縁なり。

うらやみなき |玉||我と人とのうへをくらべ見るに、人のまされる事もなく、 も今夏なれば也。 給ひぬ。 君はいとくちをしく見つけられぬる事、

はうつしごころかとよ。 メッタニジャウダントナラヌ
たはぶれにくしや。 F **()*** でこのなほしきんと

の給へば、 **つととらへて、** *中将 ハナシ マらにゆるし聞えず。さらばもろともに ・※

ボリン

こそとて、 中将のおびをひきときて、 ぬがせ給へ ば ヌグマイ アラソ ぬがじとすま**

むめる名やもりいでん引かはしかくほころぶる中の衣に。

 $\widetilde{\mathfrak{z}}^{ackslash}*$ へにとりきばしるからむといふ。

かくれなき物としるしる夏衣きたるをうすき心とそ見る。* と い ひ

^交はして、 **うらやみなきしどけなすがたにひきなされて、** 源頭出で

と思ひふし給へり。

我と同じき事をいふ詞也。ここは我も人もともに、すがたの見ぐるしきをいへり

詞のつづきにても心得べし。宿木巻に、「それもわが有さまのやうに、 うらやみなく、身をうらむべかりけるかし」。

四七

おちとまれる御さしぬきおび

|岷||前に「直衣ばかりを取て」と有。

●帯は中将の也。下に「此おびをえざらましかば」と有。かやうの事 まで心を尽されたる筆つき、 いといとめでたし

うらみても云々

新 皆波汐などのよせ詞也。 「うらみ」は浦、「かひ」は貝、「たちかさね」も 引も 「なごり」

そこもあらはに ●歌の意は、源氏君と頭中将と立かさなりき給ひて、さて引つれてか り給ひしなごり、いとかなしく、悔みても恨みても今はかひなし、と也。

[©]別れての後ぞかなしき涙川底もあらはになりぬと思へば

なし、 ₩湖月に、細流に挙られたるをひくとて、「後ぞこひしき」 と也。 何事もみな底をつくしてあらはれたるがか したるは、

おもなのさまや

く面目なき事をいへるが、後には転じたる也。 玉補「おもなし」とは、 面皮の厚く恥しらぬ心をいふ。古へは恥かし

あらだちし云々

きひがこと也。さて意は、頭中将のあらだちしに、我は心もさわがねど とある注、 ₩明星抄の今案に、「『あらだちし波』は頭中将、 付の事なるべし。 元来かの人をよせたる内侍をいかでか恨みざるべき、と也。 よろし。諸抄「よせけん磯」を頭君とせられたるは、 連々頭君をかよはせし故、 今も如此の事あると也」将、『よせけん磯』とは源 いみじ

「いかがうらみざらん」にて、落着はうらめしく思ふなり

おびは中将のなりけり

|岷| 直衣のうへにする帯也。 源内侍のかたより源の指貫にそへておくれ

我御なほしよりは色ふかしと

色をもちゐ、 官ひききによりて、こき二藍の直衣を着用すべし。官のたかきは宿徳の 引なほしのきれを用る給ふ。夏の直衣は、 す。源氏は宰相中将、うす二あるの色なり。頭中将は年はまさりたれど、 花 聴 直衣 人、 官のひききはわかき色を用ゐるならひ也云々。今頭中将は 昔は直衣のきれを帯に用ゐたる也。 「わが御なほしよりは色ふかし」 二藍或は花田を年によりて着 主上の御帯は御

内侍はあさましくおぼえければ、おちとまれる御さしぬきおびなど、

四八

サハヤク

うらみてもいふかひぞなき立かさねひきてかへ n し波のなごり

に。 べそこもあらはに、 とあり。おもなのさまや、 アッカハヅラ と見給ふもにく

けれど、 わりなしと思へりしもさすがにて

あらだちし波に心はさわがねどよせけんいそをいかがうらみぬ。

とのみなん有ける。 **・おびは中将のなりけり。 わが御なほしよりは色

ふかしと見給ふに、 はた袖もなかりけり。 あやしの事どもや。 おり

たちてみだるる人はうべをこがましき事もおほからん、 といとど御

心をさめられ給ふ。 中将とのゐ所より、 これまづとぢつけさせ給

|箋|花鳥に源氏を此段にて宰相中将と注せらる。 いまだ三位中将なり。

はた袖もなかりけり 孟_鰭袖・端袖両義也

「宮人の袖着衣」とよみしは、袖の長からん為によき人は袖

錦にてぞたたれたる」。真淵の引たるは、万葉二十「宮人の袖つけ衣秋||余||源平盛衰記・廿三「維盛は赤地の錦の直垂に、大頸・端袖は紺地のの端に又着れば端袖といふべし。鰭の字はむつかしく聞ゆ。| の袖つけ衣きしわれを」と有 萩ににほひよろしきたかまどの宮」といへる也。巻 - 六にも 「ゆふはた

似此段いとまぎらはしきを、暫く右の説どもによりてとかば、 し帯を、 もし我物かとて源氏君我御直衣と見合せ給ふに、 内侍が 色深け

と穏ならず。もしくは箋・細流の一説のごとく、辞の「将」にてもあらんか。なほ考ふべし。はじめて心づき給へるさま也。かく釈ざれば、帯を見給ふに袖のなきやうなる語路に聞ゆるをや。

とて、

このおびをえざらましかば、 △/2± タシカラウウ (゚) そのいろのかみにつつ

みて、

れば、さては中将のなりけりと見給ふにつけて、又我御直衣を見給へば、端袖も引きられてなかりけり、といふ意にて、此時によべきられたるを よくよく思ふべし。 されど、 「端袖」といふこ

あやしの事どもや

釈袖の引切れたるを見て、 始て驚きあやしみ給ふ詞也

たちてみだるる人は

心のおのづから治めらるる、と也。 「おり立て」は、其事に打はまりて物するをいふ。ここは、 いとどといへるは、空蝉・夕顔などの巻々に見えたる事どもを思ひていへるなるべし。 好色事に打はまりてみだるる人は、 いかさまにもをこがましき事多からんと、 御

孟源氏のなほしのはた袖也

いかでとりつらんと

那源氏君直衣を見給ふに、袖なかりしを、 今中将のかく返し給ふを見て、 いかにして中将の取つらんと心外に思ひ給ふなり。

この帯をえざらましかば

源氏君、我もし此中将の帯を得ざらましかばいかばかりくちをしかるべきに、幸に帯を得たれば、 みて歌かきてやり給ふ也。 とおぼして、その帯の色の二藍の紙につつ

中たえば云々

こは字音なれど、漸に歌にもよめり。 唐令所謂玉鉤、是也。腰帯及鞍具、以、銅属、革也」といへる「賀古」、[新]帯のかこは和名抄・腰帯具に、「鉸具。上音古巧反、一音教、鉸具、此問云 帯ぞ、はなだのおびの、中はたえたる催馬楽・呂・石川。 のかごとばかり られたるは、石川の歌便あり。又、あづまぢのみちのはてなるひたち帯 花。石川の、こまうどに、おびをとられて、からきくいする、 もあはんとぞ思ふ、とあれば、帯にかごとはよせあり云々。 5巧反、一音教、鉸具、此間云賀古。 今按、 今案、帯を人にと いかなる これ也。

|余||谷川士清云、「和名の鉸具は即帯鉤なれば、かぎの義也。歌に『ひた ち帯のかごと』などそへてよめり」。

石川の詞をかりていへるがおもしろき也。 石川の歌にいへるやうなる縹のおびはとりてだに見ず、かへし申す、ととし。さて、中たえば中将のかごとを我に負んかとあやふまれて、かのたえば、と也。二句「かごと」に帯の「かこ」をそへたる事、諸注のご の意也。実は二藍なるを「はなだ」とかへたるは、 歌歌の心は、 「中たえば」は石川の歌の詞を借て、 似よりたる色なれば 頭中将と内侍との中

君にかく云々

細我中はそなたへ引取れて絶はてたる、 と也。

用ゐたり。いとたくみ也。 れたる也。「たえぬる」は、 事の故にたえぬる中と思ひて、猶君をかこち恨みん、とおしかへして戯か内侍を帯によそへてよめり。君にかう引取れたる女なれば、此度の 石川の歌の末句「中はたえぬる」といふを

えのかれさせ給はじ

似此かごとをばえ遁れ給はじ、といひそへたる也。さるは、 「かごとやおふとあやふさに」などのたまへるが故也 源氏の歌

おほやけ事おほく云々

|湖師| 貫首とは、蔵人頭也。殿上人のかしらといふ心也| 貫首たるによりて、 宣下の事どもうけ給はるをい

いとうるはしくすくよかなるを

かたみにほほゑまる 「うるはしく」は、きとしたる体、「すくよかなる」は、和らがぬ体也。

₩ 源も頭もよへの事の思ひ出られて也

中たえばかごとやおふとあやふさにはなだのおびはとりてだに見*®

ず とてやり給ふ。 ァリカヘリ たちかへ テり

| 君にかくひきとられぬるおびなればかくてたえぬる中とかこた*\#\#\

٨ そのがれさせ給はじとあり。 日たけておのおの殿上にまゐり給

 \sim り。 いとしづかにものどほきさましておはするに、 頭の君も いと

をかしけれど、 おほやけごとおほくそうしくだす日にて、 いとうる

トシァッンシャントシテアルはしくすくよかなるをみるにも、 タガヒ 含 笑 かたみにほほゑまる (°)) 人 ま に

さしよりて、 ものがくしはこり給ひぬらんかし、 とていとねたげな

るしりめなり。 トゥシテサゥハアラウゾ **などてかさしもあらん**。 ^{源詞} 立ながらかへりけん人こそ

いとほしけれ (。) まことは、うしや世中よ、 といひあはせて、

物かくしはこり給ひぬらんかしか人の見ぬ間に、頭中将、源氏君の辺へさしよりてなり。

|湖||前に「御心まどはしてこりぬや、 といはんと思ひて、 たゆめ聞ゆ」

この山なる、

とかたみにくちがたむ。

さてそののちは、

何ソトイフト

● ねたげなるしり目し給ふも、わさとかくいかきさまして、 き給ふ返報をせんとし給ふさま也。 かのもど

ことのついてごとに、

ま 迎 種 子 いひむかふるくさはひなるを、

いとど物むつ

立なからかへりけん人こそ

はいとほし、と也。 |湖||頭中将の内侍とかたらんと思ひて来つらんに、 立なからかへられ

うしや世中

しや世中、 |余||案に、六帖・巻四、人言はあまのかるもにしけくとも思はま しけきを思ひていへるなるへし。 此歌にていへり。下に、とこのやまなる」とあれば、 うの字はよの字の誤にや。 しかばよ 人言の

くるを、

カびしと思ひありき給ふ。

中将はいもうとの君にも聞えい

ダウナ人ゆゑ、

とおぼししらるべし。

内侍 ャハリ 女はなほいとえんにうらみか

とこの山なる

《犬上のとこの山なるいさや川いさとこたへて我名もらす な

でず、

たださるべきをりのおどしくさにせんとぞおもひける©やん*^{薬学地}

|花||人の問ともしらぬよしをこたへてうき名もらすなといへるは、 ためたる心也。 口 か

之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許瀬余名告奈(余)古今集墨附、四句「いさとこたへよ」と有。 余古今集墨附、 もとは万葉十一「狗上

でとなき御はらばらの御子たちだにうへの御もてなしのこよなきに

いひむかふる

「言迎ふる」にて、戯言をいひて相手になりいどむ種子とする意也

いとと物むつかしき人故と

内侍故と源氏の思ひしり給はん、と也。此「べし」もれいの批判なり

●いとどは、始より物むつかしく思ひ給ひしに、こたひの事によりていとど也。

語脈、点のことし

しせんの時おちあたるたねにせん、とおもふ心也。

さるべきをりのおどしぐさに

やんことなき御はらはらの云々

新源のきらはしく恥かしかるべければ、 おどしぐさには成べし

|細||是より「うるさくてなん」といふまで草子地也。

● これよりは頭中将の源氏君といどみ給ふ事のよしをいひとく也。「やんことなき御腹々の御子たち」とは、 といふ意也。 貴き后・女御などの御腹に生れ給へ

うへの御もてなしの云々

₩源氏君は帝の御寵愛の格別なる故に、 自然とむつかしかりて、何事もゆつりさけつつ、 あらそひ挑みなとはし給はぬに、

この中将はさらにおしけたれ聞えしと

|細||誰も誰も源には所を置給へ共、中将はさもなき也。

この君ひとりぞ云々 ●「おしけたれ聞えじ」とは、何事をも光映なくつぶされまじ、との意也。

みかとの御妹のはら

さのみ劣らじと思ふからにや、何事もいとみ給ふ、と草子地よりいへり えことなるに、其上大宮のはらにてかしつかれてそだち給へば、源にも |湖||源氏は御子といふはかりこそあれ、 頭中の父も大臣の中にてはおぼ

●大臣家の権威こよなかりしこのほどの世には、げにかやうにこそ思 ひ給ひけめ。心を付て世の様を見るべし

人からもあるべきかきりととのひて

ひておはしける、と也。 ₩頭中将の人品もあるへきほどのよき事ととのひて、才芸も何事も足

る、 耐桐壺巻よりこなた、所々に見えたる大殿ばらの事、 さまなどををりをりかくあらはして何となく其脈をとほし続けられた いとめてたし。主客正副の文法、前後相照して味はふべし。 またこの頭中将

この御中とものいどみこそ

る也 ₩源氏君と頭中将との御中のいとみといふ意なるはいふもさらなれど、 いへるなるへし。へされとうるさくてなん」とは、「猶いと多かりしか あやしかりしか」と有を思ふに、なほこの源内侍の事をむねとさして さのみしるさんもうるさくて書ととめたり」といふ意をふくめた

ぎりととのひて、

き、れいの法ありていみじくめでたし。 とき、さてここにいたりて、再び内侍の事を継て書とどめられたる筆つる」といふまでは、頭中将の源氏君に所をおかすいとみ給ふゆゑよしを -文「やんことなき御腹々の」といふより、「たらひてそ物し給ひけ

七月にて后ゐ給ふめりし

花藤壺の女御、 中宮に立給ふ事也。

かやうの所にめりしとやうのてにをはをつかはれたるは、 の後より思ひいでておほやうにかたるさまに書なしたるにて、 て、前後此、物語する

> ムッヵシガリ わづらはしがりて、 いとことにさり聞え給へるを、 この中将は、 さ

更 マイー チョトシタ らにおしけたれ聞えじとはかなき事につけても、 思ひいどみ聞え給

ふ◎この君ひとりぞひめ君の御ひとつはらなりける △源公●の御

子といふばかりにこそあれ、 我も、 おなじおとどと聞ゆれど御おぼ

えことなるがみこばらにて、 またなくかしづかれたるは、 ドレ なにばか

おとるべききは、 人がらもあるべきか

とおぼえ給はぬなるべ

何ごともあらまほしうたらひてぞものし給ひける

© Z* の御中どものいどみこそ、 あやしかりしか。 されどうるさくて

なん』七日 源氏の君宰相になり給ひ ぬ 御門

下屋の一下屋が出れる個心つかひちかうなりて、 このわかみやを坊に

釈源氏の君、 参議に任し給ふ也

御門おりゐさせ給はんの

|岷| 桐壺帝御下位あるべき御下心なり|

「ちかうなりて」とは、近々にと思しめし定められ

細藤壺の御腹の若宮、

御うしろみし給ふべき人おはせず |湖師||東宮坊にとおぼしめす也。

といふ也。源氏執柄・右大臣能有例歟。 |河| わか宮冷泉院の御外舅親王達にて、人臣にて御うしろみすへき人なし、

源氏のおほやけ事しり給ふすちならねは

ここには少し時の権をさけて書たるか。 たりの筋を先いふのみ。さて源氏の執政は、左大臣能有公の例はあれど、の意なるべし。末に光る源氏の執政し給ふは自然の事也。ここには一わ によし源氏として臣下なるが有とも、今は只藤氏ぞ執給ふ例なれば、とふべきを、是は皆親王たちなればさるすぢならず、又さるみこたちの中 新君宮東宮にたち給ひて末、 即位などあらんには御外舅の執政もし給

> と思ひ聞えさせ給ふに、 御うしろみし給ふべき人おはせず。 御 は は

方。皇子たちにて、 源氏のおほやけ事しり給ふすぢならねば、

はは宮をだにうごきなきさまにしおき奉りて、 ッヨミ つよりに、 とおぼす

になん有ける。 弘徽殿はいとど御心うごき給ふ、 ゴモットモ さ

れど、 朱雀原也 東宮の御世いとちかうなり 帝御詞 つぬれば、 うたがひなき御くらゐな

●この源氏はただ臣下の皇子といふほどの意にいへり。 此立后の時も源氏君の宰相になり給へるよしかかれさるも、 作者の意、ここにかくいひ置て末に源氏君の執政し給ふ事を 伏案なるべし。 心をつけて見るべき也 いへるは、 深き心ある事と

|万||藤壺中宮に立給へば、御領なども過分にまゐれば、わか宮の御うしろみの代につよりに、 と御門のおぼしめす

●御領のみの故にも有べからず、すべて御威光ありて万のつよみになり給ふべければ也

こうきでんはいとど云々

東宮の御世いとちかう 一根藤つぼ中宮にならせ給へる故に、 いとどねたき御心の動き給ふ、 と也。されどこれは道理也、と地より評じていへる、 いとめでたし。

|湖師||朱雀院の御代近づきぬれば、う:●駅「東宮の」といふより帝の御詞也。 うたがひなくこきでんは皇太后になり給ふべし、

蓋

五.四

おぼしのどめよとぞ

|岷|御門の弘きでんへことわり仰らるるさま也。

紅葉賀

げに東宮の御ははにて云々

郷 ここより又草子地也。

「廿余年」、音に読む也

事也。帝に仕へ給ふ年数といふは非なり。 ₩本居翁云、朱雀院東宮に立給ひては、 朱雀院今年廿一二才になり給へば、東宮を生給ひて廿余年といふ居翁云、朱雀院東宮に立給ひては、まだ十四五年なれば年数かな

れいのやすからず

上文に「ことわり也」といへる評語の心をあかしたる筆也。徽殿がたの人のいふ」といへるはわろし。「世人」はただ世上の人也。 「れいの」とは、世人の口さがなきをさしていへり。万水一露に 弘

参り給ふ夜の御供に

宮の御後見たるべき伏案をやうやうに顕はしたり。 一根藤壺中宮となりて、入内し給ふ夜の御供に源氏君も参り給ふ也。若

なかにも、

おなじ后と聞ゆる中にも云々

駅 この かがやき、又帝の比類なき御寵愛さへましませば、世の人も格別に尊びの御女ならず、先帝の后腹の四の宮、殊には若宮の御母とある御威光もるなり。后といへばいづれもみな后なれども、其中にこの藤壺は、臣下 わか宮の御事にはあらず。 敬ひ奉る、といふ意なり。「きさいばらの御子」とある御子は、藤壺也。 「同じ」といふ語は、すべて后となり給ふ人の事を広くさした

ましてわりなき御心には云々

湖師藤壺に御心のかかれば也。

にものぐるほしく飛たたまほしく思はるるをいふ也 たからん、と思ひ給ふ也。「そぞろはしき」とは、相見まほしくて不覚く中宮となり給ひては、いよいよおよびなくへだたりて相見奉ることか 「いとど及なき心ちし給ふ」とは、今までだにつれなかり しを、 か

|湖師||藤壺を雲ゐ高く及なく見奉るにつけても、 恋路のやみははれがた

● 花鳥・細流などに「心のやみは若宮の御事也」と注せられたる、 ここはさし も若宮の御事にはあづからぬやうなれど、 心 さ

> り。 と 過 **おもほしのどめよ、とぞ聞えさせ給ひける。げに東宮の御母に**

甘よ年になり給へる女御を、 おき奉りては、 △藤ツボラ」越 イ給ひナシ

がたき事なりかし、 とれいのやすからず世人も聞えけり©まゐり給

ふ夜の御ともに、 ^薬日の君もつかうまつり給ふ。 おなじ后と聞ゆる

御おぼえにさへ物し給へば、人もいとことに思ひかしづき聞えたり。 発帝2.后 腹 をさいばらの御子、 玉のひかりかがやきて、

たぐひなき

* よしてわりなき御心には、 御こしのうちも思ひやられて、 マスマス

よびなき心ちし給ふに、 そぞろはしきまでなん

つきもせぬこころのやみにくるるかな雲ゐに人をみるにつけて***

ŧ_° とのみひとりごたれつつ、 物いとあはれなり。 若宮
セイチャウシ

ひとりごたれつつ のやみ」などいふ詞は、 かならず子を思ふ闇の事と聞ゆる例なれば也。

釈誰にのたまふべき事にもあらず、 とりごたれ」といへるなり。 おのづからかく思ひ給ふなれば、「ひ

いと見奉りわきがたげなるを云々

也。評判せぬといふ語はなけれど、めりかしといふ辞にておのづからしとおぼせど、人はしかとは思ひよらぬなるべし、何とも評判をせぬ、と秘若宮の源氏君と見奉り分がたきまで似給へるを、藤壺はいとくるし か聞ゆる也。

げにいかさまにつくりかへてかは云々

たげなる」とあるをうけてげにといへる也。、「月日の光の云々」、、世の也と世上の人も思へる、といへる也。げにといへるは、「見奉りわきが じさまに見え給ふは、月と日との光の大空に似かよひたるやうなるもの をいかやうなるかたちに作りかへたりとも、 人も思へる」といへるは、〝思ひよる人なきなめりかし」といへる故を、 まの人は世に出給ふまじ、然るを、若宮のつゆたがはずして源氏君と同 むこの意は、源氏君の御かたちはかぎりもなくめでたければ、 、然るに、 源氏君に劣らぬかたち有さ 誰人

> 給ふ月日にしたがひて、 イト゚タートンルルト) 分と見奉りわきがたげなるを、* 宮いとくる 苦

しとおぼせど、

か へてかは、 ☆ミ劣(おとらぬ御ありさまは、 世に りマレ出りてものし給はまし。 月

日 のひかりの、 そらにかよひたるやうにぞ、 世の人もおもへる

, 若宮の見分がたきまでにおひ出給へるは」などの意を含めてよくよく味はふべし。 云々と思ひて疑はぬなめりとことわれるなり。〔世に出ものし給はまし」

業平朝臣の古事に思ひよせて恋のかたにまぎらはし、さて若宮のおよずけ給ふよしをいひて、世人の源氏に似給へるを疑ひ思はぬゆゑをことわら 御中うとくなりゆくべき端をあらはし、其次に藤壺の参内に源氏君も御供し給ふよしをいひて、かの御後見たるべきはしをにほはせながら、却て て若宮を東宮にとおぼしめすより御後見のなき事をいひて、藤壺の立后もそれらのためなるよしを説き、其中に弘徽殿の御事を評じて、やうやう €いへるより下、後の巻々の伏案をたてて、先ッ「源氏君宰相になり給ひぬ」といひ置て、次に帝のおりゐさせ給はん御下心をいひ、それが此巻は、大かた藤壺巻の事を主として、且若宮のおひ出給へる事をいふ巻なる故に、此事をもてとぢめられたり。〔七月にぞ后ゐ給ふめ ても及ばぬ姿といふべし。 れたるなど、つゆもすきまなき書ざま也。其中にも、ここの末の二三句は、殊にいみじくかすめられたる筆つきにして、 よくよくくりかへしあぢはひて、 つくりぬしのぬけいでたるざえを賞すべくなん かいなでの文かきのかけ それにつけ

紅葉賀 五五